

平安京左京三条一坊四・五町跡

2019

有限会社 京都平安文化財

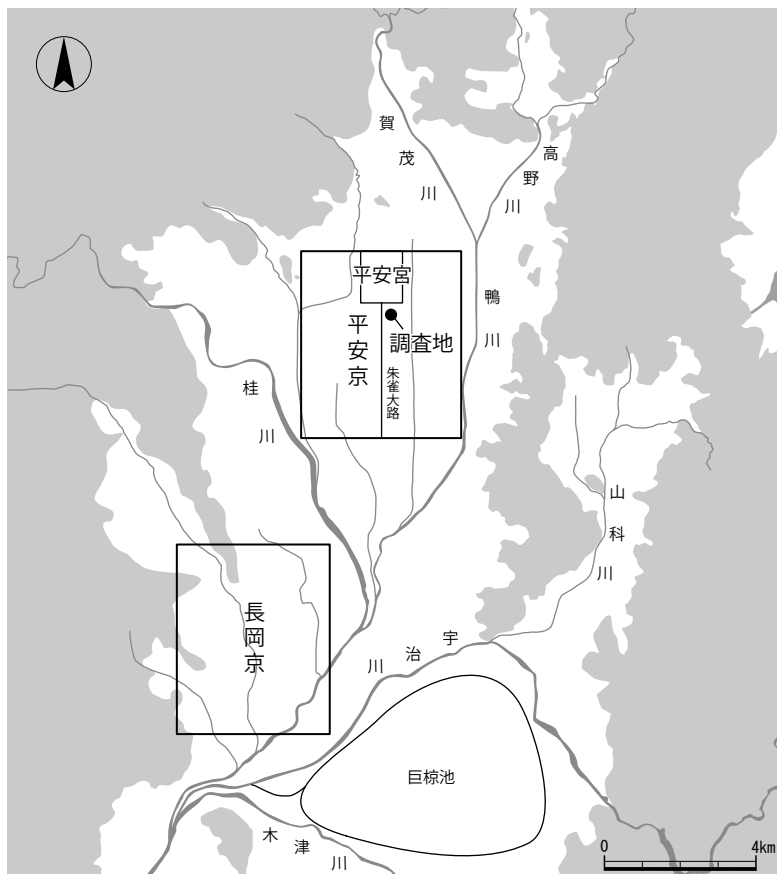


例 言

1. 本書は、京都市中京区西ノ京勸学院町 3, 西ノ京南聖町 2 に所在する平安京左京三条一坊四・五町跡の発掘調査報告書である。〔文化財保護課受付番号 18H189〕
2. 本調査は、GOLD FOREST 株式会社の委託により有限会社京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査の面積は、180㎡である。
4. 発掘調査は、平成 30 年 8 月 3 日から 9 月 26 日まで実施した。
整理・報告書作成は平成 30 年 10 月 1 日から平成 30 年 12 月 28 日まで実施した。
5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制で行なった。
指 導 機 関 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
調査検証委員 京都外国語大学教授 南 博史
同志社女子大学教授 山田 邦和
調 査 主 体 有限会社 京都平安文化財
調 査 員 小泉 信吾
調査補助員 谷原 未紗
作 業 員 有限会社 京都平安文化財
東海アナース株式会社、マエダリメインズ
測量・図化 浅川 永子、小林 雅幸、木建 梓、田中 侑
遺 物 実 測 川端 玲子
調査中は小森 俊寛（京都平安文化財顧問）の指導を得た。
6. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を小泉・小林、遺物写真を小森・小林が撮影した。
7. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。
京都府教育庁指導部 文化財保護課、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課、
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
8. 本書の執筆は、第 1 章、第 3 章は小泉、第 2 章と第 4 章のはじめに・1. と第 5 章は小森、第 4 章 2. は植山 茂、その他表などは谷原が担当した。報告書の編集は主に小泉が担当し、コンピューター上の実務は小林・木建・田中が行なった。
9. 出土遺物については、関連する図面・写真などの記録類とともに、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課にて保管する。

凡 例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点はT.P 値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P」と略称している。
2. 地図は京都市都市計画局発行の 1:2500「壬生」「聚楽廻」を使用し編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 40・50・100 分の 1 とした。
5. 遺構名は土坑、ピット、溝、井戸と表記し、遺構の種類別に一連の通し番号を付加した。
6. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。
7. 遺物番号は通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
8. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ拡大、縮小した。
9. 本書に収録した図資料等の引用元は、第 5 章文末に【参考文献】として掲載した。



本文目次

例 言

第 1 章 調査の経緯と経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘調査の目的と経過	2
第 2 章 位置と環境	5
第 3 章 調査成果	7
1. 基本層序	7
2. 遺 構	10
(1) 調査第 1 面	
(2) 調査第 2 面	
第 4 章 出土遺物	17
はじめに	17
1. 土器・陶磁器類	19
2. 瓦類	26
第 5 章 まとめ	35

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	調査地位置図 (1:10000)	1
第 2 図	調査区配置図 (1:300)	2
第 3 図	平安京における調査地の位置	5
第 4 図	土層と遺構面の関係概念図	7
第 5 図	南壁土層断面図	8
第 6 図	東壁土層断面図	9
第 7 図	調査第 1 面 検出遺構平面図	11
第 8 図	土坑 5 平面・断面図	12
第 9 図	井戸 2 平面・断面・井筒桶立面図	12
第 10 図	調査第 2 面 検出遺構平面図	14
第 11 図 A	溝 2 出土土器・陶磁器	19
第 11 図 B	溝 2 出土土器	20

第 12 図	溝 3 出土土器・陶器	21
第 13 図 A	湿地中～下層出土遺物	22
第 13 図 B	湿地最上層（埋土か）出土遺物	24
第 14 図	溝 1 出土焼き締め陶器	25
第 15 図	近世整地土層出土遺物	26
第 16 図	軒瓦	27
第 17 図	丸瓦	29
第 18 図	平瓦	30
第 19 図	現場認識概念図	36

表 目 次

第 1 表	日誌略抄	4
第 2 表	出土遺物観察表	32-34

図版目次

図版 1	調査第 1 面 1. 南区調査第 1 面 西から 2. 南区道路状遺構 1 北西から
図版 2	調査第 1 面個別遺構 溝・井戸 1. 南区溝 1 南から 2. 北区溝 1 北西から 3. 南区井戸 1 北から 4. 南区井戸 2 北から 5. 北区井戸 3 北から
図版 3	調査第 2 面（北区） 1. 北区調査第 2 面 西から 2. 北区調査第 2 面 南西から
図版 4	調査第 2 面（南区） 1. 南区調査第 2 面 西から 2. 南区調査第 2 面 北西から
図版 5	調査第 2 面 遺構 1 1. 南区調査第 2 面全景 坊城小路・湿地 2. 南区調査第 2 面溝 3 （坊城小路西側溝）杭列・湿地
図版 6	出土遺物 土器・陶磁器 1. 南区坊城小路東側溝（溝 2）北西から 2. 南区坊城小路東側溝（溝 2）東辺杭列 西から 3. 南区第 2 遺構面坊城小路東側溝（溝 3）西辺杭列、湿地 北東から
図版 7	出土遺物 土器・陶磁器
図版 8	出土遺物 土器・陶磁器
図版 9	出土遺物 土器・陶磁器・瓦
図版 10	出土遺物 瓦

第 1 章 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

調査地は、京都市中京区西ノ京勸学院 3 から同西ノ京南聖町 2 にかけて位置する。

GOLD FOREST 株式会社が、2018 年に当地において簡易宿泊所（ホテル）の建設を実施する計画を京都市に提出した。当地は、遺跡平安京跡において左京三条一坊四町から五町の一部に位置する。このため京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課（以下「保護課」と略する）が、工事実施に先立ち 2018 年 6 月 26 日に当地において遺跡の遺存状況を把握すべく試掘調査を実施した。その結果、左京三条一坊四町と五町の一部とその間に平安時代の坊城小路の東西両側溝と見られる遺構の遺存を確認した。

この試掘調査の成果に基づき、保護課は建設実施に先立ち文化財保護法第 92 条に基づく発掘調査が必要と判断し、施主の同意のもと工事に先立つ発掘調査の実施が決まった。発掘調査の実施にあたっては、保護課の指導のもとに施主 GOLD FOREST 株式会社から有限会社京都平安文化財が委託を受けて発掘調査を実施することとなった。

実際の発掘調査は、2018 年 8 月 3 日から開始した。8 月の猛暑に加えて、調査期間中には複数の台風が来襲した。大雨により幾度も調査区が水没するなど、今年度の 8 月・9 月の発掘調査



第 1 図 調査地位置図

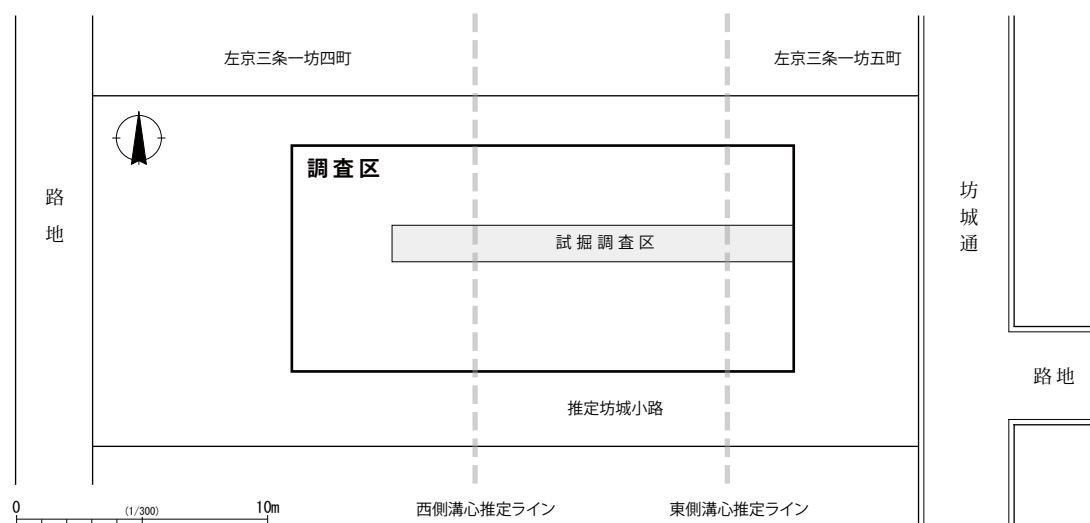
をとりまく気候環境は悪く、屋外での作業を基本とする発掘調査の進行に多大な影響を受けることとなった。調査日程にも大きな影響を受け、休日出勤などではカバーが難しかった。しかし、日々の工夫と努力でカバーし、調査成果も得られ、9月26日には調査を終了することが出来た。

2. 発掘調査の目的と経過

発掘調査の主な目的は、南北に走る坊城小路関連の遺構および左京三条一坊五町の一端、小路西側となる同四町東端部の遺跡の様相把握である。なお、試掘調査の情報によると坊城小路西側溝以西が湿地状を呈している可能性が高い。平安時代の坊城小路西側築地塀や四町北東部の平安時代前期の様相は特に注目される。

発掘調査を実施する調査区は、簡易宿泊所建設予定地内の東西20m・南北9m、面積180㎡である。東西長のトレンチ調査区は、南北方向に延びる坊城小路の調査にとっては適切な調査区となっており、東西20mで小路全幅がカバー出来、四・五町の宅地側の一部にも及んでいる。しかし、調査区は比較的小規模であり、敷地全体もかなり限定的な広さであるため、機械力と手掘り調査によって生じる廃土の置き場の確保も困難であった。このため調査は2期に分けて実施することとなった。1期は調査区南側約3分の2程であり、2期は残る北側の調査を行なった。1期の南区は8月3日から調査を開始し、2期の北区の調査は9月22日に終了している。

調査第1面の検出にあたっては、近・現代の整地土層以下から江戸時代中期頃までの宅地、または耕作地関連と見られる積土土層に関しては、主に機械力で掘り下げを行なった。その後に残った積土の整地土層を手掘りにより廃土し、丁寧な精査を加えて、中世から江戸時代前期頃と見られる調査第1面を検出した。調査第1面においては、中世末期から江戸時代初頭頃にまで残っていた坊城小路の路面の残欠や、その西方に延びる低湿地を埋めて形成されたと見られる宅地面



第2図 調査区配置図

を検出し、また同面では土坑、ピット、井戸など上層からの遺構を含めて検出し調査している。また調査区東辺部においては、江戸時代前期に形成されたと見られる南北方向と東に広がる石敷路面状の遺構を検出して調査を進めた。調査第1面の全景写真撮影や平面実測作業を終了した後、全面には見られないが中世と見ている薄い整地層を掘り下げて、調査第2面を検出し、平面調査を進めた。調査第2面は、坊城小路路面および東西両側溝、さらに西側溝以西では、苑池などの可能性もある湿地、また東側溝以東では狭小ながら五町の西端を検出し、平面調査と記録作業を行ない、9月に入ってようやく1期の調査を終了した。両側溝にとどまらず、修築が加えられてはいたが、路面部を確認出来たことは成果の1つに加えられる。

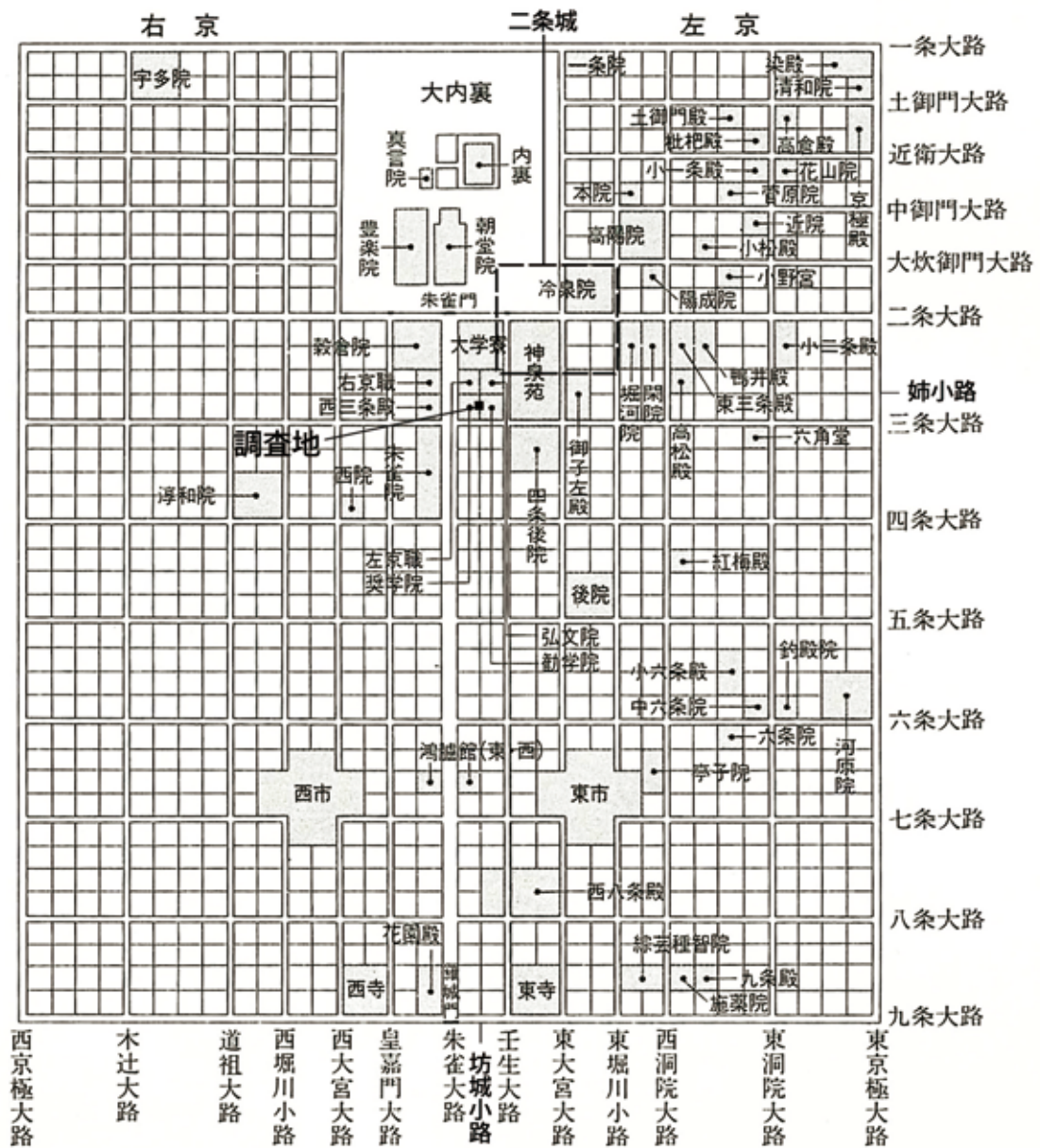
1期の南調査区を埋め戻した後に、2期の北調査区を1期の調査と同様に調査第1面直上近くまで重機掘削を行なった。天候の影響もあり、残る調査期間に余裕がなくなっていたため手早く済ませて、調査第2面へと調査を進めた。2期の調査第1面では南調査区で検出した江戸時代の坊城通りの路面かと思っていた遺構や南北方向の関連溝、調査第2面では平安時代の路面と東西両溝、および西側溝以西へ広がる浅い湿地などを確認し調査した。南調査区で確認した主要遺構のすべてが北へ連続しており、調査区北壁外へさらに延びていることが明らかになった。2期の北区の調査は9月22日に終了し、9月25日から26日に埋め戻しを行ない、調査実務を終了した。9月26日には現場事務所を含めて撤収を完了している。

第 1 表 日誌略抄

年 月 日	調 査 概 要	備 考
2018 年 8 月 3 日	1 期 南区機械掘削 手掘り作業開始	
7 日	機械掘削終了	
8 日	第 1 面検出調査	江戸時代前期以降の坊城通り?を検出
9 日	第 1 面の全景写真 平面実測の記録作業	
23 日	第 1 面の調査完了	
27 日	第 2 面検出調査開始	平安時代の坊城小路路面、側溝、 湿地などを検出調査
9 月 13 日	第 2 面全景写真 平面実測など記録作業	
14 日	第 2 面記録作業終了	
15 日	1 期 南区埋め戻し終了 2 期 北区機械掘削開始	
16 日	機械掘削終了 手掘り作業開始	坊城通りの北への延びを確認
18 日	第 1 面検出調査	
19 日	第 1 面検出調査終了 第 2 面検出調査開始	坊城小路の北への延びを確認
21 日	第 2 面記録作業 土層断面図記録作業	湿地も西・南・北へ広がる
22 日	記録作業終了 調査完了	
25 日	調査区埋め戻し	
26 日	調査区埋め戻し完了	

第2章 位置と環境

本遺跡は、平安京左京一坊四町北東部の東端から坊城小路をはさみ五町の北西部の西端に及ぶ。朱雀大路（現千本通り付近）の1本東側に並ぶ坊城小路は、四町と五町の間を南北方向に走る平安宮大内裏の南面正門の朱雀門（現千本二条付近）にも近く、宮の東南フロント隣接地域という京域内の一等地に位置している。当地を含む平安宮の西側、南側、東側に接する左京の各坊は、諸司厨町と総称されているように、各役所の関連施設や天皇家、藤原家などの上級貴族の宮殿や邸宅が建ち並んだ地域である。



第3図 平安京における調査地の位置

左京三条一坊内では、一・二・七・八の計4町は国の大学寮、四町には在原家系の奨学院、藤原家系奨学院、六町には和気清康の私宅を教育機関とした弘文院などの国立や私立の大学や、附属施設が多く建ち並んでいた。また三町には左京職が設置され、京を運営・維持する重要な役務を執行していた。一坊の東半分の九から十六町の計8町には、東西2町（約250m）×南北4町（約500m）の広大な規模に及ぶ神泉苑が、桓武天皇によって造営されていた。現代では一部苑池があり残存してはいるものの、当時の約16分の1以下と縮小されている。左京に対して朱雀大路をはさんだ右京一坊には穀倉院右京職が設置された。また、右京三条一坊六町（藤原良相邸）の西三条第（百花亭）では「三条院釣殿高坏」と記された墨書土器が出土している。平安時代前期では左京・右京の三条一坊周辺は教育・文化の核となる文化ゾーンであった。

平安宮から神泉苑および当地を含むこの地域の原地形を見ると、平安宮から南東に位置する神泉苑の北側の2町は、古い扇状地の台上側となる高み側上面に位置している。扇状地の高みの端となる扇（先）端ラインが、宮の南辺から現二条城南西部でやや南へ逃げて、神泉苑の北側2町分の南辺を東へ、さらにそこから南東へと走る。この扇端ラインより南側は急に2m程低くなる。神泉苑の源泉は、高み側の現二条城城内にあるが、大池は低地となる十町から十五町以南に位置している。当調査地は神泉苑の大池のある低地側に位置している。扇端以下の低地は、扇状地下の伏流水が湧き出で、湿地などが形成されることが多い。当地域が左京の他地域より早く衰退が進むのは、この地形に一因があるとみられる。三条一坊の神泉苑より西側は、右京や朱雀大路の後を追うように平安時代後半期となる中期後半以降には序々に衰退が進むようである。今回の調査でもその変遷を把握する必要がある。中世頃には芹田などを含む耕作地になっていたようである。再度宅地的な土地利用がされるのは江戸時代に入ってからである。1つの契機は、東北隣地に築造された徳川の二条城であろう。城の周辺は町並整備が加えられ、城の南西部地域には東町西町の京都奉行所やその関連施設が建てられる。特に今回の調査で検出した坊城通りの路面は、江戸時代前期の二条城築造に伴い整備された、東側の建物などの基礎を成す整地層の西辺の施設外周に整備された道路であると見ている。

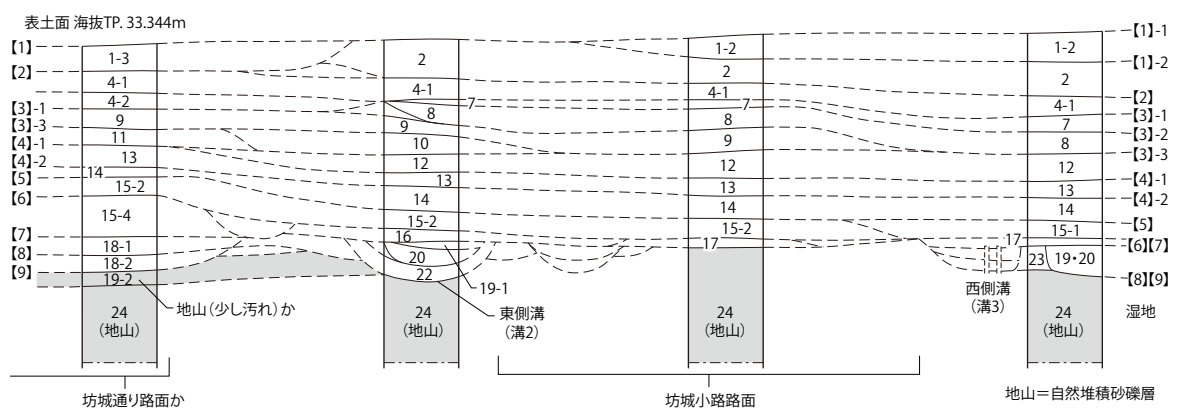
第3章 調査成果

1. 基本層序（第4図）

現地表面を形成する1・2層から枝番を除き、地山（自然堆積土層）までで計24層確認しているが、この中に湿地や側溝などの構内堆積土層が含まれている。また同一番号に枝番を付しているものは、部分的土層で分層出来るが、まとめられるものを同番としている。ここでは土層上面に成立している遺構面との関連を踏まえて、基本層序に対する理解を記しておく。土質、土色などについては、番号を共通させているので土層断面図（第5・6図）の注記を参照されたい。

遺構面は現表土面を第1面とすると、褐色系の砂礫主体の地山19-2層上面の第9面までの計9枚が確認出来る。枝番含めて1層、2層が第1面の現表土面を形成する。第2面は4層群をベースとしている。第3-1面は7層から9層上面、第3-2面は8層から9層上面、第3-3面は10～11層上面が調査区東半に認められる。10層、11層より上位の土層は、江戸時代末期から近代・現代の積土的整地土層である。第4-1面は江戸時代中期に12層から13層上面に形成され、第4-2面は江戸時代前期末から中期前半までに形成される。両者とも江戸時代中期に主に展開するのでまとめておいた。

第5面は江戸時代前期に15-1層・15-2層上面に、第6面は同前期の初め頃に15-4層、16層、17層上面に形成される整地土層である。二条城周辺の初期整備と関連する土層と見ている。しかし15-4層下層部、16層、17層は中世末期から桃山時代にまで遡る可能性はあるが、明瞭な認識は得られていない。



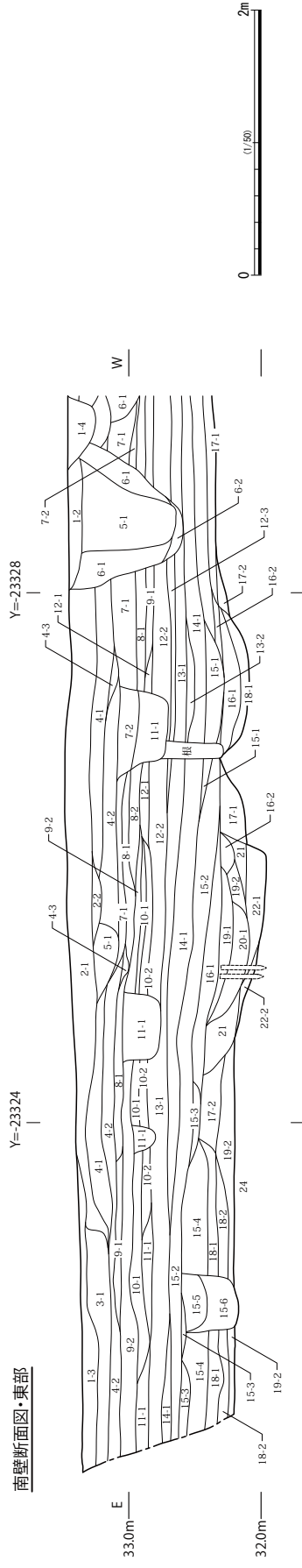
◎土層中等に付した番号は、土層断面(第7図)に掲載分参照。

◎遺構面の番号は【】で明示した。なお調査で使用している第1面第2面とは異なる。

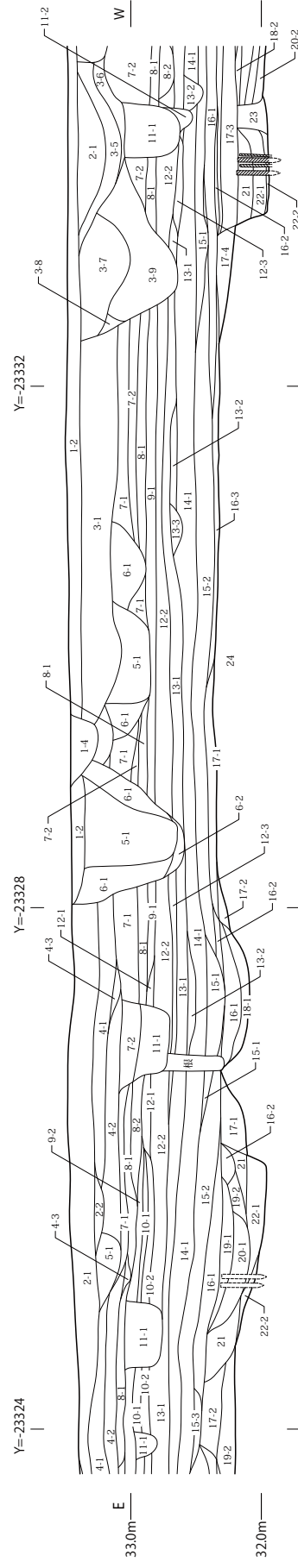
【1】-1・2：現代表土 【2】：近代～現代 【3】-1：近代 【3】-2：江戸時代末～近代か 【3】-3：江戸時代末期か 【4】-1：江戸時代中期
【4】-2：江戸時代前期～中期 【5】：江戸時代前期 【6】：江戸時代前期(調査での第1面一上層からの深い遺構も調査)
【7】：平安時代から中世 【8】：平安時代前期 (【7】【8】は合わせて調査第2面とした) 【9】地山直上面(～平安時代初頭)

第4図 土層と遺構面の関係概念図

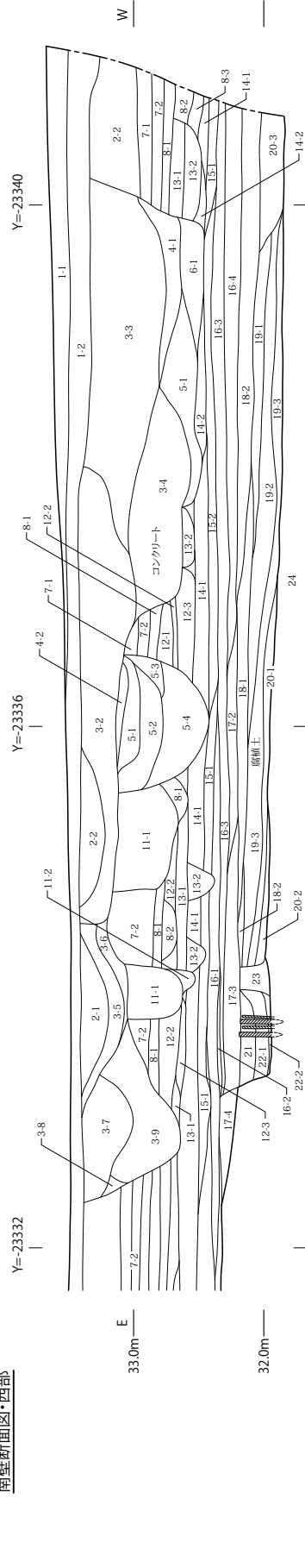
南壁断面図・東部



南壁断面図・中央部

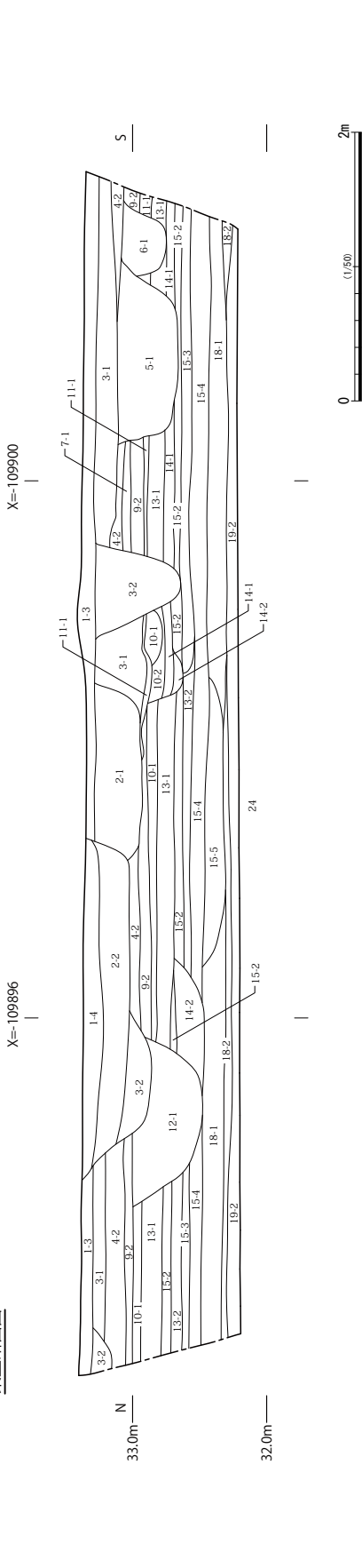


南壁断面图·西部



第5图 南壁土层断面图

東壁断面図



- | | | | | |
|-----|---------|--------------------------------|-----|--|
| 1-1 | 10YR7/1 | 灰白色 | 砂礫土 | |
| -2 | 10YR6/2 | 褐灰色 | 砂礫土 | |
| -3 | 10YR8/2 | 灰白色 | 砂礫土 | |
| -4 | 10YR8/1 | 灰白色 | 砂礫土 | |
| 2-1 | 10YR4/3 | にじい、黄褐色 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む) | | |
| 3-1 | 10YR3/3 | 暗褐色 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む) | | |
| -2 | 10YR3/1 | 黒褐色 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む) | | |
| -2 | 10YR3/2 | 黒褐色 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む 粘性有) | | |
| -3 | 3と類似 | | | |
| -4 | 10YR3/1 | 暗褐色 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む) | | |
| -5 | 10YR4/1 | 褐灰色 砂礫土 (φ 0.05~0.3cmの砂粒を若干含む) | | |
| 6 | 2.5Y3/2 | 黒褐色 (φ 1~2cmの礫を若干含む) | | |
| -7 | 2.2と類似 | | | |
| -8 | 3.6と類似 | | | |
| -9 | 2.5Y3/3 | | | |
| 4-1 | 2.5Y3/1 | 暗オリーブ褐色 (φ 1~2cmの礫を若干含む) | | |
| -2 | 2.5Y3/2 | 黒褐色 (φ 1~2cmの礫を若干含む) | | |
| -3 | 4.2と類似 | | | |
| 5-1 | 5YR2/1 | 黒褐色 砂質土 | | |
| -2 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色 泥砂 | | |
| -3 | 5YR2/2 | 黒褐色 砂質土 | | |
| -4 | 7.5Y3/2 | オリーブ黒色 泥砂 | | |
| 6-1 | 5YR2/2 | 黒褐色 砂質土 | | |
| -2 | 7.5Y3/2 | オリーブ黒色 泥砂 | | |

- | | | |
|------|----------|--|
| 7-1 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色 泥砂
($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の礫を少量含む $\phi 0.05 \sim 0.3\text{cm}$ の砂粒を若干含む 粘性少し強い) |
| 2 | 7.5Y3/2 | オリーブ黒色 泥砂
($\phi 1 \sim 2\text{cm}$ の礫を若干含む $\phi 0.05 \sim 0.3\text{cm}$ の砂粒を若干含む 粘性少し強い) |
| 8-1 | 5YR4/1 | 灰青色 ($\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ の酸化鉄粒を若干含む 粘性強い) |
| 2 | 5YR3/1 | 黒褐色 ($\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ の酸化鉄粒を若干含む 粘性強い) |
| 3 | 8-2と類似 | |
| 9-1 | 7.5Y2/2 | オリーブ黒色 ($\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ の砂粒を若干含む 粘性有) |
| 2 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 ($\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ の砂粒を若干含む 粘性有) |
| 3 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色 泥砂 ($\phi 0.2 \sim 0.3\text{cm}$ の砂粒を若干含む 粘性少し有) |
| 10-1 | 5Y2/1 | 黒色 ($\phi 1 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む 粘性強い) |
| 2 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 11-1 | 10YR3/4 | 暗褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む 酸化鉄粒を若干含む 粘性強い) |
| 2 | 11-1と類似 | |
| 12-1 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 2 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 3 | 7.5YR4/6 | 褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 13-1 | 10YR6/6 | 明黄褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 2 | 10YR7/6 | 明黄褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 3 | 10YR6/8 | 明黄褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 14-1 | 10YR4/6 | 褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 2 | 7.5YR4/3 | 褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 15-1 | 7.5YR5/2 | 灰褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |
| 2 | 7.5YR4/1 | 灰褐色 砂礫土 ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ の礫を少量含む) |

- | | | | |
|------|------------|------|--------------------|
| -3 | 7.5YR4/2 | 灰褐色 | 砂礫土(φ2~3cmの礫を少量含む) |
| -4 | 15.2~3Cに類し | | |
| -5 | 7.5YR4/3 | 褐色 | 砂礫土(φ2~3cmの礫を少量含む) |
| 16-1 | 5YR5/1 | 褐灰色 | 砂粘土(φ1~2cmの礫を少量含む) |
| -2 | 5YR4/2 | 灰褐色 | 泥砂(φ1~2cmの礫を少量含む) |
| -3 | 5YR5/2 | 灰褐色 | 泥砂(φ1~2cmの礫を少量含む) |
| -4 | 5YR6/2 | 灰褐色 | 泥砂(φ1~2cmの礫を少量含む) |
| 17-1 | 10YR5/2 | 灰黄褐色 | 泥砂(φ1~3cmの礫を多く含む) |
| -2 | 10YR4/2 | 灰黄褐色 | 泥砂(φ1~3cmの礫を多く含む) |
| -3 | 17-2に類し | | |
| -4 | 17-2に類し | | |
| 18-1 | 7.5YR5/1 | 褐灰色 | 泥砂(粘性・塑性少し) 《埋め土?》 |
| -2 | 7.5YR4/1 | 褐灰色 | 泥砂(粘性・塑性強い) 《埋め土?》 |
| 19-1 | 7.5YR2/3 | 暗褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| -2 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| -3 | 7.5YR3/3 | 暗褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| 20-1 | 10YR4/4 | 暗褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| -2 | 7.5YR4/4 | 褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| 21 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 泥砂(φ5~10cmの礫を多く含む) |
| -3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色 | 砂礫土(粘性・塑性強い) |
| 22-1 | 7.5YR8/2 | 灰白色 | 粘土質土(粘性・塑性強い) |
| 22 | 2-1に類し | | |
| 23 | 7.5YR3/2 | 黒褐色 | 泥砂(粘性・塑性少し) |
| 24 | 地山 | | |

第6圖 東壁土層断面図

中世関係の土層が極薄く、江戸時代前期以降から後期、さらに近代、現代にかけて積み上げられた整地土層が、人工的堆積土層の厚さのほとんどを占めている点は、右京域と左京域の中間的と見ていい人工的堆積土層のあり方と言える。

第7面は、18-1層から24層の地山直上面に連続する平安時代前期の内に形成され、中世にまで時間幅を持っている。第8面は、18-2層から24層上面に連続する平安時代初頭頃に形成された遺構面である。なお、18-1層と18-2層は五町西辺部に見られる整地土層である。

第9面は、19-2層から24層のほぼ地山直上面であり、奈良時代以前から平安時代初頭の年代幅を持つと見ておく。湿地は24層砂礫主体の地山土層を肩にして成立しており、最上部は平安時代末期から中世初頭に埋没するようである。

2. 遺 構

(1) 調査第1面（第7図、図版1）

本調査は調査区掘削土の仮置場および作業ヤードの都合で、南側部分と北側部分の2段階で調査を行った。調査第1面は、基本層序の項でいう第5面から第6面に対応する。この調査第1面では、江戸時代前期から中期以降の深い井戸などの遺構の下部も同時に検出し調査している。第1面で確認した遺構はまとめて記載する。

調査第1面で検出した遺構は土坑6基、井戸3基、道路状遺構1路、溝1条（道路状遺構内）である。遺構については各遺構ごとに記載し、遺物や埋土については検出状況により遺構の時期ごとに報告する。

南区の近世遺構

近世の遺構はピット・土坑・井戸・道路状遺構・溝である。

ピット1 土坑1よりやや斜めの北西方向で検出され、規模は南北方向に42cm、東西方向に40cmである。深さは16cmを測り、楕円形を呈している。

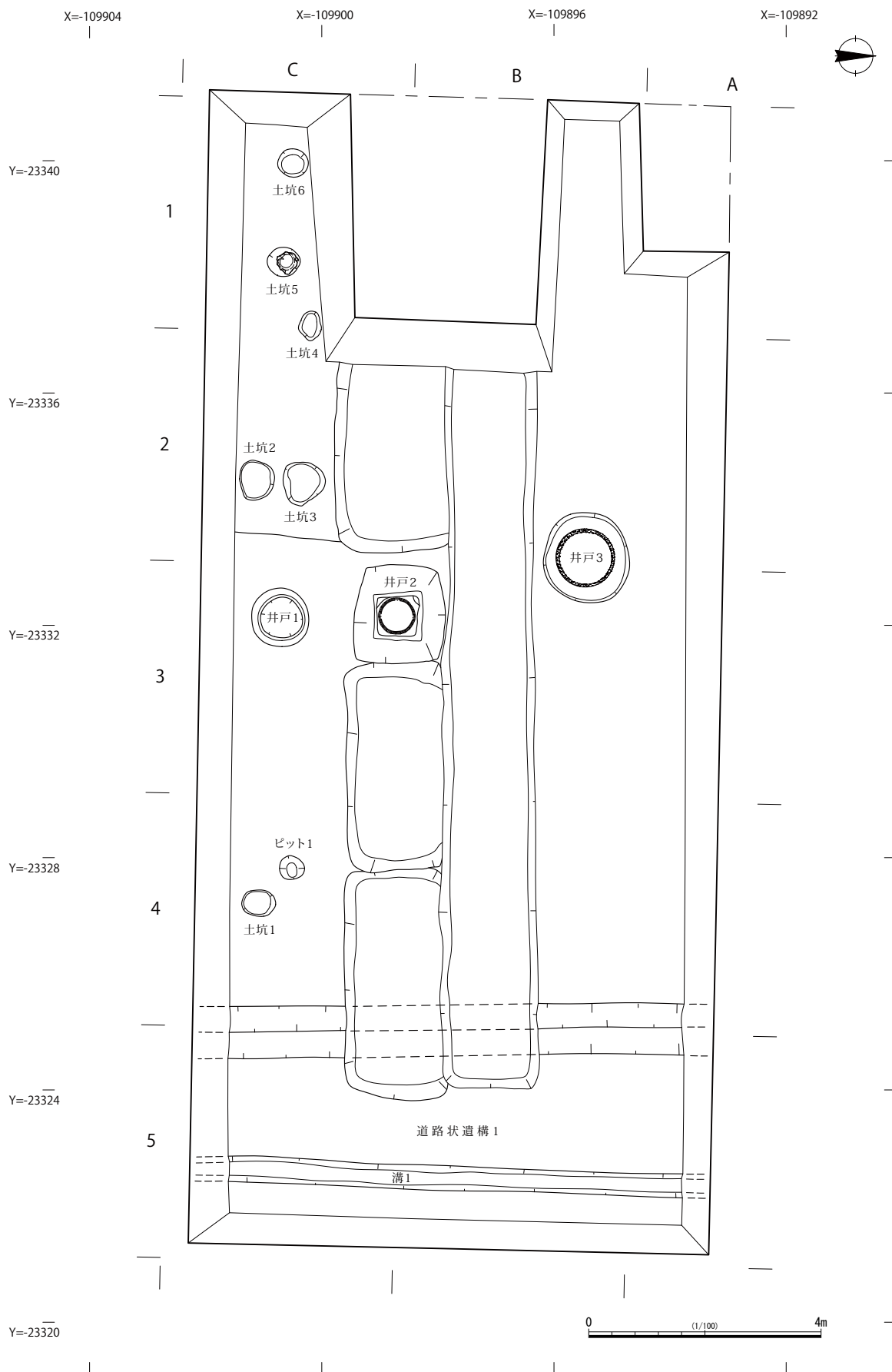
土坑1 道路状遺構1より西約3m南壁部分で検出した。規模は南北方向に長軸約59cm、東西方向に短軸45cmの卵型の楕円形を呈している。深さは18cmである。出土遺物は須恵器片・土師器・陶器片・鉄器（現代）と混在して出土している。

土坑2 調査区中央部の南壁付近で検出され、規模は南北方向に60cm、東西方向に69cmである。深さは24cmを測り、不整系な円形を呈している。土坑内からは須恵器片が出土している。

土坑3 規模は南北74cm、東西74cm、深さ24cmを測る。形状は楕円形である。土坑内からは、須恵器片、土師皿、布目瓦、陶器片が出土した。

土坑4 調査区南西部北側で検出。規模は南北40cm、東西51cm、深さ34cmを測る。形状は東西に長い楕円形である。土坑内から須恵器片、土師皿が出土している。

土坑5（第8図） 調査区南西部端で検出。規模は南北57cm、東西50cm、深さ15cmを測る。形状は南北方向に少し長い楕円形である。上半部が欠損した埋嚢が出土しており、埋嚢内からは土



第7図 調査第1面 検出遺構平面図

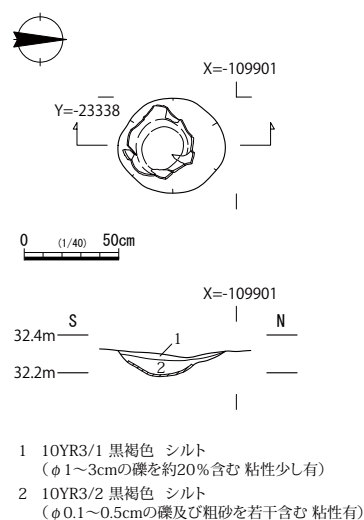
師皿、播鉢片、貝殻片が出土している。埋甕を設置している内廁の便所甕の底部であろう。

土坑 6 調査区南西部西端で検出。規模は南北 58cm、東西 47cm、深さ 18cm を測る。形状は南北に少し長い楕円形である。土坑内からは須恵器片、土師皿が出土している。

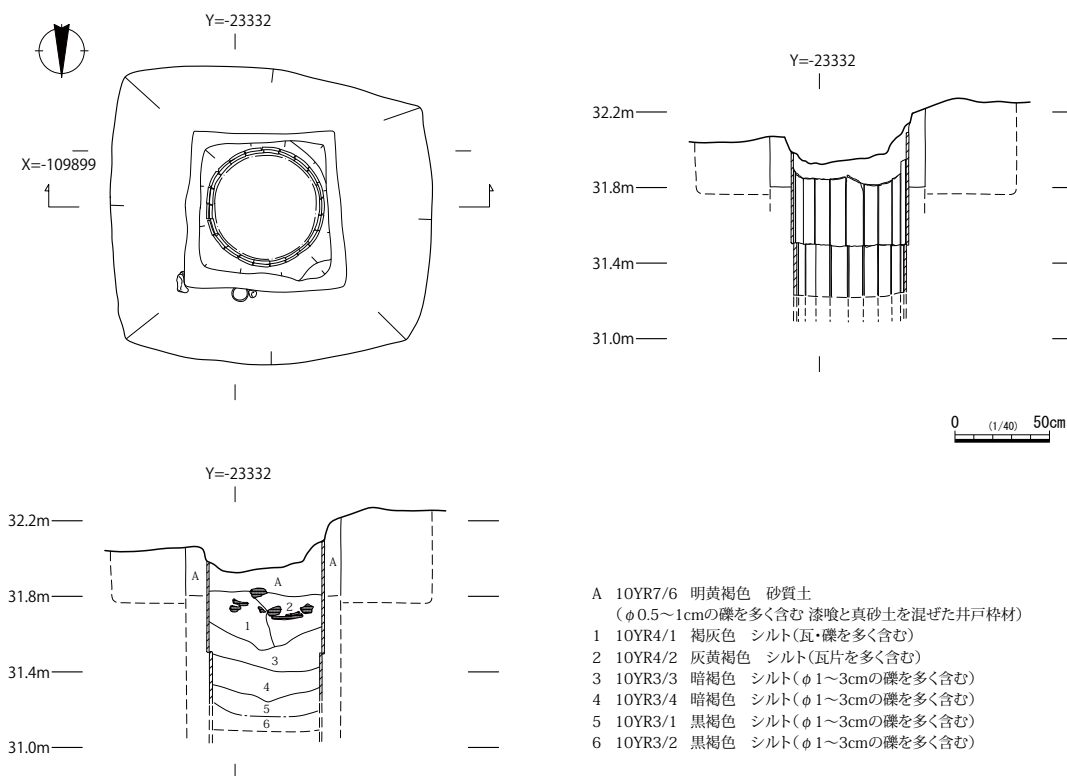
井戸 1 (図版 2) 調査区南側中央部で検出。規模は掘方が南北・東西とも 98cm のほぼ円形である。掘り方を除く井戸の外側には、明黄褐色の漆喰材が円形に設置されていて、漆喰材の幅は約 5～10cm である。掘り方を除く井戸そのものの規模は、南北 85cm、東西 90cm のほぼ円形である。井戸内からは、崩落した漆喰材の塊が多く出土している。出土遺物は、井戸を埋めた際に投棄したと見られる棧瓦を含む瓦が多く出

土しており、平安時代の布目瓦も少数混入出土する。他には、須恵器、土師皿、播鉢片が出土している。井戸下部の調査は、湧水が多く、崩落の危険性が高かったため、約 60cm 程の掘り下げ調査にとどめた。井戸の形成時期は、出土遺物からみて江戸時代後期頃と見られるが、埋没は近代に入る可能性が高く、下限は幕末から明治頃と見られる。

井戸 2 (第 9 図、図版 2) 井戸 2 は井戸 1 の北側で検出。漆喰材で方形に囲み、井筒は木桶を杵材にして数段組み合わせて構築していた。漆喰は約 5～10cm の幅で南北 85cm、東西 85cm のほぼ正方形である。井筒は外円部で南北 66cm・東西 58cm と南北に少し長い楕円形である。井戸



第 8 図 土坑 5 平面・断面図



第 9 図 井戸 2 平面・断面・井筒桶立面図

2 の掘り下げ調査も湧水が著しく、崩落の恐れもあり約 1 m の深さにとどめた。井筒の木桶は幅約 7 ～ 10cm 前後の板材を円形状に巻き、2 段に組まれていた。井戸底までにはさらに 1 ～ 2 段は組まれているようだ。井戸内からは須恵器、土師皿、播鉢、布目瓦、軒丸瓦、輸入陶器などの遺物が多く出土した。井戸の埋土中央あたりでいわゆる神様の息抜きとされる祭祀目的の竹筒を確認している。

出土遺物から井戸 1、2 が並存していた可能性も十分あるが、短期内の間の造り変えも考えられるので結論はおいておく。

道路状遺構 1 (図版 1) 調査区東端部分で検出した小石敷的な路面状を呈する遺構である。検出範囲は現存で、幅約 220cm で南北に延びている。路面は径約 3 ～ 5cm 前後の礫混じりの砂礫土で覆われて敷設されていた。調査区東端が少し高く、西側に向けて約 5cm 前後なだらかに下がっている。路面精査および掘り下げた段階で出土した遺物は、須恵器、土師皿、播鉢、瓦質土器、緑釉陶器などの平安時代前期頃の遺物が多数含まれていた。遺構は精査および掘り下げ段階で上層、中層①、②、下層上面と分けられ、下層下面は平安時代以降の坊城小路路面である。平安時代の路面より約 30cm 程度の積土的整地で石敷路面を形成し、部分によって補修しつつ道路状を維持していたことが明確になった。出土遺物から見ても江戸時代前期頃で、さらに時代を絞ると寛永年間頃 (1624 ～ 1645 年) に推定される。道路状遺構は、調査区のさらに東側に広がる可能性が高く、位置から考えて江戸時代前期の二条城廻りの整備の際の西辺をなす道路状遺構と考えられる。時間位置的には徳川家光の二条城の際の構築に伴うもので、二条周辺街区の整備に伴い一本分東へずれて築造された坊城通りの可能性が高い。

溝 1 (図版 2) 道路状遺構の中心部分で検出され、幅約 30cm、深さ 40cm の規模で南北に走る。構内から出土した信楽の播鉢片から、道路状遺構 1 を整備した際、同時に構築された可能性が高い。遺構性格は側溝の一種と見ておきたい。

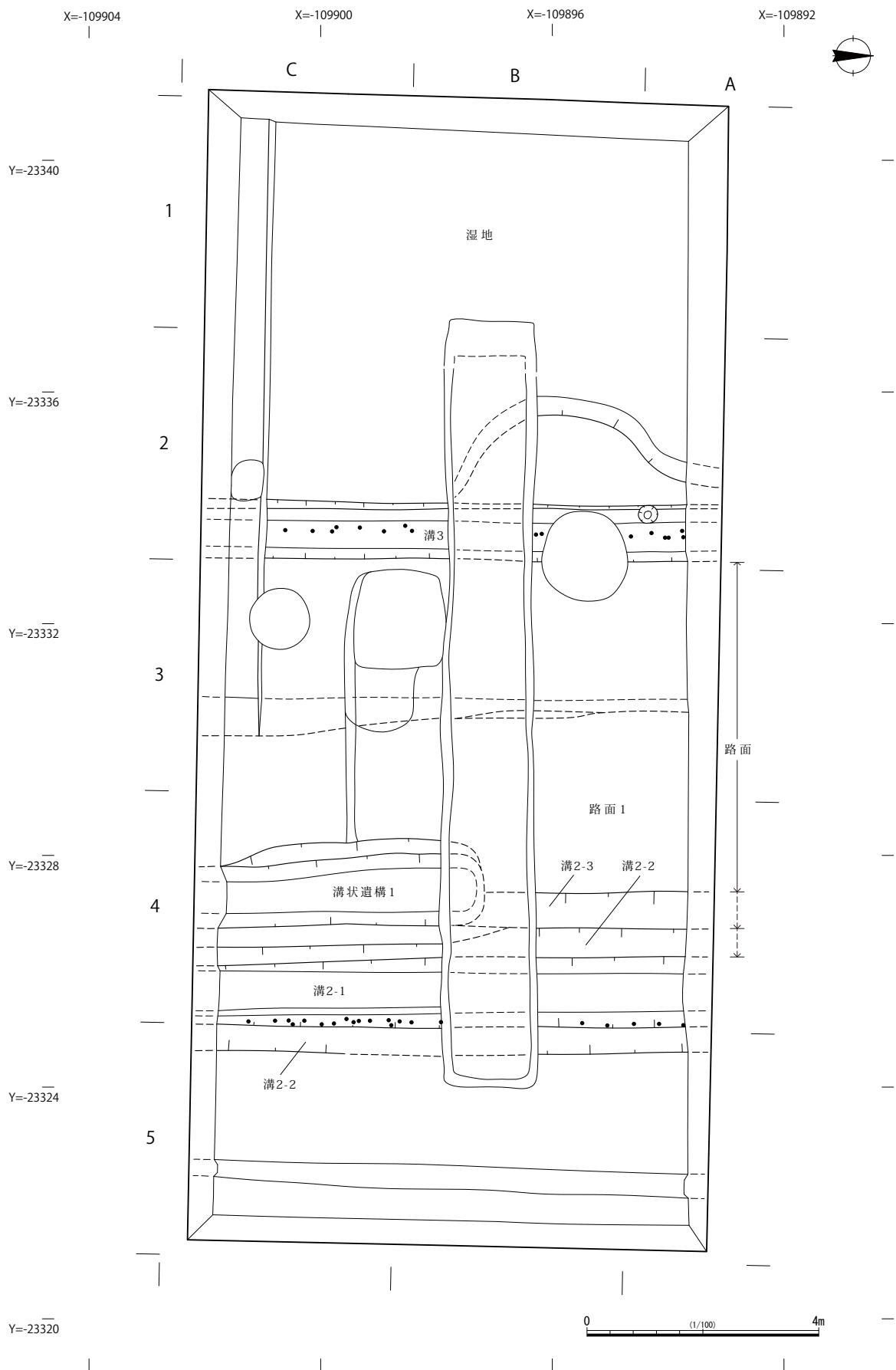
北区の近世遺構

道路状遺構 1 および溝 1 は、北区にまで延び、さらに北壁以北へ延びている。他には井戸 3 を検出したにとどまる。

井戸 3 (図版 2) 調査区北西部で検出した井戸で、規模は外枠は南北、150cm、東西 155cm のほぼ円形で、幅 5 ～ 10cm の漆喰で囲まれていた。井戸枠部分は上部も同様に、幅 5 ～ 10cm の漆喰で回りを固めて作られていた。規模は南北・東西とも 90cm のほぼ円形である。深度は、湧水と崩落が著しいため明確に出来なかった。出土遺物は瓦片、陶磁器片などである。南側で検出した井戸 1・2 より約 1 m 西側に位置する。井戸 3 は北隣の町屋に伴うものと推測しておく。

(2) 調査第 2 面 (第 10 図、図版 3 ～ 図版 5)

調査第 2 面は、基本層序でいう第 7 面～第 9 面にあたり、順次まとめて報告する。調査第 2 面で検出した主な遺構は、平安時代頃の坊城小路東側溝 (溝 2-1・2-2・2-3) と西側溝 (溝 3) である。また西側溝に付属したと考えられる杭列と横板を配した護岸施設も検出した。



第 10 図 調査第 2 面 検出遺構平面図

坊城小路の幅については『延喜式』左右京職の京程および町内小径条の記述に従えば、小路は四丈(1丈=10尺=2.98445m)で約11.93mである。小路の道幅は築地心までの距離であり、築地・犬行・側溝・路面で構成される。延喜式の記載は文献上のことであり、実際の発掘調査では数値は異なる。今回の調査では計測方法の測点を決める基準は、恣意的な要素を排して任意な点ではあるが、杭列の心から心の測点として計測した。坊城小路西側溝・杭列中心部から東側溝杭中心部までの幅は各杭の平均値で8.5mである。路面幅はその範囲におさまると考えられる。

以下では、東側溝杭列と三条の溝および西側溝などについて各遺構別に記して報告する。

坊城小路東側溝(溝2-1)(図版6) 側溝としては断面観察の結果3時期あり、補修しながら溝を維持したと考えられる。さらに溝中心部分に杭を打ち込み、杭列と横板で東側溝を構成していた。この点は同様の規模で存在している。溝幅は残存で約110cm、深さ約23cmを測る。打設していた木杭は確認できたもので21本であったが、横板は残存していなかった。杭幅は明確に単位を計れるもので約45cm(≒一尺五寸)前後であった。他に杭が集中している部分については、補修等の打ち込みと考えられる。杭材は残存状態が悪いものの長方形の角材である。横板は残存していなかったが、木杭の打ち込み状況および西側溝で検出した杭列と比較して、東・西両側に横板を入れて構築したと考えられる。

坊城小路西側溝(溝3)(図版5・図版6) 東側溝と対を成し、両側溝によって路面幅および路面が維持され、坊城小路を構成していた。西側溝も東側溝同様に溝を掘り、その中心部分に杭列を配し横板をはめ、粘土を貼り付け西側を補強している。木材は角材を使い、確認出来た範囲で16本である。横板は数枚残存していたが、検出状況の段階で劣化が著しく取り上げは出来なかった。木杭の打設単位は東側溝と同様約45cmの間隔であった。西側溝より西方向については自然的な湿地帯が広がっていた。坊城小路より西には平安京の中心線である朱雀大路が構築されており、湿地帯が広がっていたとは考えにくい、調査結果では三条一坊四・五町坊城小路西側は湿地帯が広がっていたと考えられる。

溝2-2(図版6) 東側溝より西で検出した。溝幅は約70cm、深さ約15cmの規模である。溝方向は南北に延びほぼ真北に近い。残形は西への傾斜面状を呈し、早い段階の溝の一部とも見られるが、犬走り部が崩れたとも考えられる。出土遺物は、9世紀の内に位置付けられる土師器・須恵器が主体である。出土遺物からも平安時代前期内の所産と考えられる。

溝2-3(図版6) 溝2-2よりすぐ西側で検出した。溝幅は約70cm前後。深さ約20cmである。東側溝を起点として約1.6m離れて位置し、溝2-2同様ほぼ真北で南北方向に延びている。溝2-2同様に路面の東肩の溝側の崩れとも考えられる。出土遺物は、9世紀の土師器・須恵器が少数出土しており、平安時代前期内の所産と考えられる。

坊城小路について 坊城小路については東側溝・西側溝の検出で道路幅が明確になった。道路幅の寸法については、築地心から築地心間の寸法での明示が基本である。京内街路は、大路小路の別なく築地・犬行・側溝・路面で構成される。今回の調査では、杭列・横板で区画された東西両側溝と路面を検出した。西側溝の杭列の西側で、築地犬走りは湿地状を呈しており、この部分で

は西側の築地犬走りなどは未構築であった可能性も考えられる。特異な例であり、今後の周辺調査の蓄積を得た上での結論が必要だろう。

延喜式の記載に従った数値が小路築地幅、半分 2.5 尺、犬行 3 尺、側溝幅 3 尺、路面幅 2 丈 3 尺である。メートル換算では 1 丈 = 10 尺は 2.98445 m になる。痕跡が不明で難しいが、坊城小池東側の築地および犬行を敢えて求めるならば、溝 1 の西端肩から溝 2-1 杭列の間と見て、幅は 1.64m であり約 5.5 尺とほぼ合致する。また杭列から溝 2-1 の西端の幅は約 90cm 前後で、延喜式記載の側溝 3 尺にもほぼ合致する。さらに溝 2-1 の西端から溝 3 東端までの幅が、検出幅で 7 m 20cm 程で、かまぼこ形化による肩部の若干の広がりを考慮すると、造成当初は規格の 2 丈 3 尺であったと見ている。

調査出来た路面や犬走り見込み部から側溝の計測数値は、延喜式に記載されている小路の各部の寸法によく近似したものであった。道路軸の方向も、京都市埋蔵文化財研究所による条坊復元図が持つ南北方向の小路の方向位にほぼ重なっている。

溝 2-3 の西側に残った約 1.5 m 前後の礫敷状の路面部は、最上層的理解が可能であり、平安時代後期あるいは中～近世初頭頃まで小道化していた、平安時代に構築された路面の残欠と見ている。両側溝からの出土遺物は平安時代前期の内に位置付けられる土師器、須恵器、緑釉陶器が主体である。これらの事から調査した坊城小路は、平安時代の初期には構築されていたが、小さな変遷の後に前期、あるいは中期の早い段階には側溝は埋没し失われた見られる。しかし、路面は幅を減じながら平安時代後期にまでは残り、さらに小道化が進む室町時代、あるいは江戸時代初め頃までは残存していたものと考えられる。

第4章 出土遺物

はじめに

当調査地からは、土器・陶磁器類と瓦類を中心にして他に少数ではあるが土製品、石製品、金属製品などがコンテナバット（約 60 × 40 × 15）にして 9 箱、さらに遺構の一部を成した材を含む木製品がコンテナにして 3 箱程、合わせて 12 箱の遺物が出土している。遺物出土量は、左京の一画にありながら少量にとどまり、都市的衰退が平安時代中期以降急速に進むとされる、右京の調査地での少量さに準じる程度である。出土量は多くはないが、都市遺構出土遺物としての多様さは有しており、時代に沿って概観しておく。

平安時代前期の遺物は、坊城小路の東西西側溝やその西に広がる湿地（池か？）帯から、一定量まとまった形で出土したものを中心にして、新しい時代の包含層や遺構内推積土へ混入して出土したものを加えると、今回の出土遺物の中では最も大きな位置を占めている。種類別では、土師器碗 A、坏 A、皿 A、杯 B、高坏、煮炊具としての使用痕（スス付）を残す甕類、須恵器坏 A、坏 B 同蓋、皿鉢、埋蔵具・壺・甕類など良品を中心とするが、生活用具的な基本的土器類が中心である。他にかなりの量の山城産系を主体とした緑釉・緑彩陶片を含む緑釉陶器碗皿や少数の灰釉陶器碗壺、また地方遺構では出土例のほとんど見られない白色土器の碗・皿など、中国からの輸入品は見られなかったが、国産の高級的良品や祭器的遺物も少なくない。また、黑色土器 B 類風字硯、灰釉陶器の風字硯、須恵器の円面硯、同坏蓋硯は須恵器坏 B 蓋の内面を天地逆にして硯面として使用する。須恵器の坏 B 蓋を硯として使用しているものは、転用硯との見方が一般的である。しかし、平安京では蓋のつまみを取った状態で仕上げたものなども出土が見られるようになる。このような型式変化や坏蓋硯との名称が文献史料に見られる点などから、須恵器坏 B 蓋は当初から硯として作られたものを多く含むと考えられる。当調査地の出土資料の中に、坏蓋硯と称してよい天井内面の器面が、墨を磨った結果であるとしてよい平滑（ツルツル）化した使用痕、および墨の付着の残るものが一定量確認出来る。坏蓋硯と見たものは、天地逆に図化して掲載した。他の左京域に比べると、遺物出土総量は少ないが、円面硯や風字硯に坏蓋硯まで加えると、全体の出土量の少なさからすると、硯の占める割合がかなり高いと見てよいだろう。このような出土遺物の特徴は、三条一坊の西半の文教地区的性格を反映しているのだろう。

当調査地は、平安宮近接地域に位置しているためか、平安時代前期の瓦類も出土遺物の中では、大きな位置を占めている。なかには平城宮型式の重圈文軒丸瓦の大きな破片などが含まれている。他にも幾つかの軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦が、坊城小路西側溝と湿地内推積土層、および平安時代以降の整地層などへの混入遺物として出土している。これらの平安時代前期の瓦類は土器・陶磁器と同様に、小片の出土が主で、接合出来る同一個体片の出土例もほとんど無く、原位置から 2 次、あるいは 3 次的に移動して包含層などに埋没したのことが多いと見ている。使用建物などの検討については、平安宮や宮周辺官衙関係施設などから出土した、既存の資料との比較

検証から類推せざるを得ないだろう。

平安時代の遺物類は、土器・陶磁器や瓦類ともに平安時代中期前半（10 世紀）頃からは、減少傾向を示す。10 世紀後半代は両側溝や湿地等の前期の遺構も埋没が進むようである。当調査地が狭小であることから、町などのレベルでの地域の盛衰については言及しないが、当地に限って言えば、遺構と遺物の動きから左京域内に位置するにもかかわらず、10 世紀の中期前半頃以降には、右京の多くの地域と同様に、衰退方向への動きが始まっていると読み取ることもできる。中期後半となる 11 世紀にはこの動きがさらに進む。左京三条一坊西半の内でもその南部は、極所的な可能性もあるが、平安時代中期には耕作地が徐々に進んだと見る事もできる。ただ瓦類については包含層に混入した形ではあるが、中期の瓦も一定量出土はしている。平安宮や二条大路に面した公的施設などへの使用瓦の拡散的混入品の可能性もある。

遺構は明確なものを確認出来ないが、遺物は平安時代後期となる 12 世紀代頃には、土器・陶磁器および瓦類ともに少数ながら増加傾向が認められる。鎌倉時代となる 13 世紀前半頃以降である平安時代後期から鎌倉時代初頭頃の遺物には、土師器皿類、中国からの輸入白磁碗、少数の瓦器碗類が認められる。ただこの時代の遺物出土状況は、遺構に直結しておらず、当地の再画期と見る事は難しい。三条一坊の東半部を占める禁園の神泉苑およびその周辺地域、平安時代後期後半から鎌倉初頭頃に武家の為政者や、その関係者達の手が入る様である。当調査地でのこの時期の若干ながら見られる出土遺物の増加は、神泉苑およびその周辺地域での動きを反映したものである可能性も考えておきたい。

13 世紀頃から室町時代後半代および桃山時代頃までは、出土遺物は極少数にとどまる。当地は中世から近世初頭頃までは、耕作地的状態が続くものと見てよいだろう。遺物出土量はすぐに増加を示さないが、調査地東辺部は 20 ～ 30cm 程高く、調査区東壁から西へ 2m 程で肩部となり、西部の低地側へ緩く下る。肩部を西限とする整地が行われ、その上面は石敷路面状を呈する。西肩から 1m 程東に少し深い側溝とも見られる溝が南北に走る。この溝の出土遺物は平安時代前期頃のものが多いが、生産年代が 16 世紀末から 17 世紀初め頃と推定される信楽産の播鉢が共伴出土している。使用痕のある播鉢であり、使用と廃棄年代は確実に下るだろう。これらのことから、この整地とその上面に形成された路面および側溝的な溝は、寛永期の徳川家光による二条城の改再築と、それに伴う城の西から南西部を含む京都町奉行所および関連施設の建設を含めた、城周辺の町並整備に伴う工事により設定設置されたものと見て良いと考えられる。姉小路と三条通り間では、奉行所関連施設の整備の西限は、調査地の東辺部で検出した南北に走る道路状遺構の西肩にあたると考えられる。整地西限あたりに南北に沿う形で設置された坊城通りは、平安時代の坊城小路よりちょうど 1 本分東へずれて、再構築されたものと理解できる。町割り基準が平安時代の朱雀大路から東半分は縮小する形で残った大宮大路通りに変わったことに、東へのずれの原因があるものと推測される。

江戸時代の土器で国産陶磁器や棧瓦、屏瓦を含むくすべ瓦類や瓦質土器などの出土状況と、整地作業による宅地面の形成の様相からは、当地の宅地化は江戸時代の中期以降に進むようであ

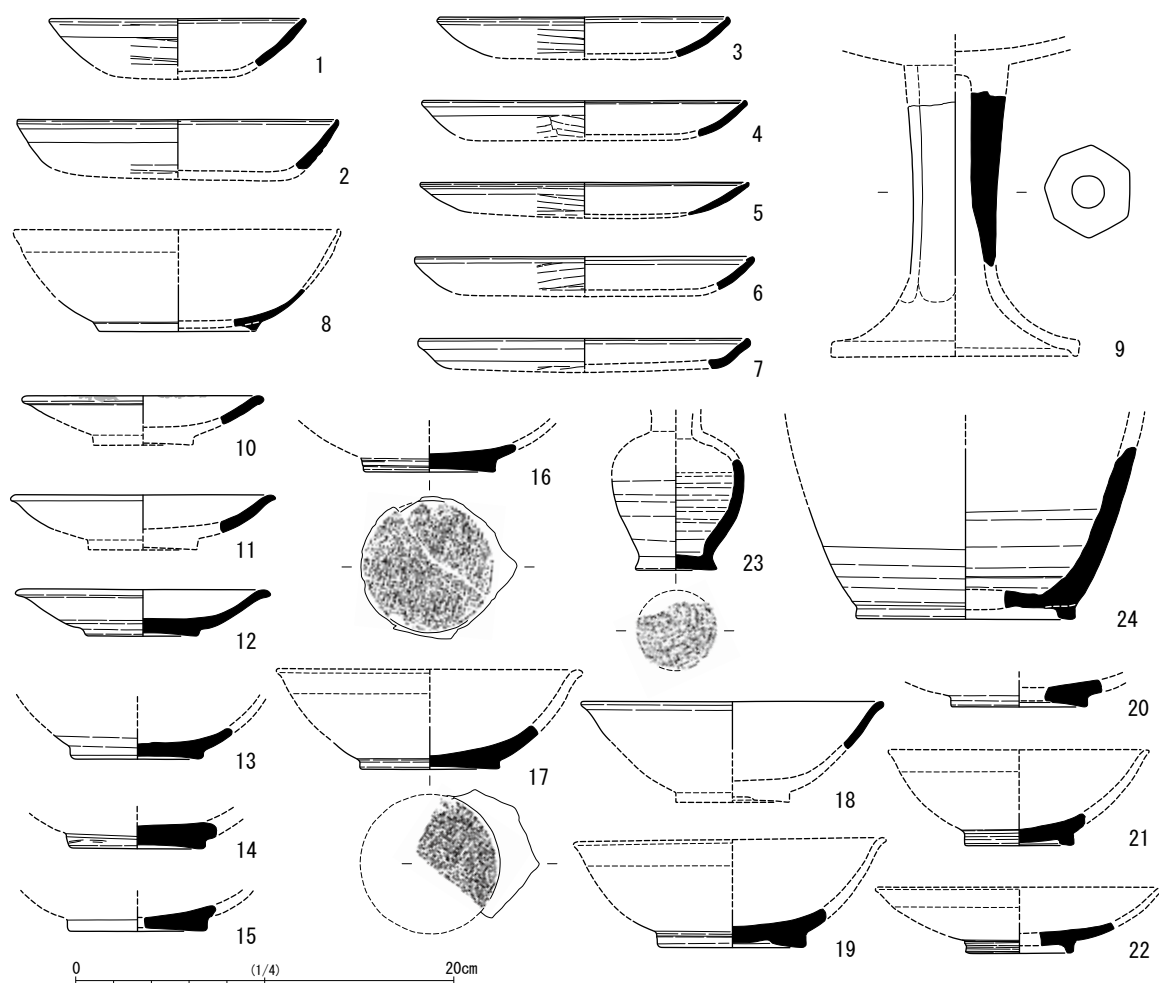
る。しかし、中期以降から後期の内に、大きな火災にあって再築されるようである。だが、それらも明治に入って、奉行所や周辺の関連施設が解体された以降には、当地を含む坊城通り以西は耕作地に戻るようである。再度宅地化が進むのは近代に入って山陰線が設置され、二条駅が建設される以降であろう。

遺物の報告は、平安時代のものを中心に提示する。

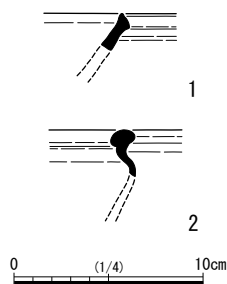
1. 土器・陶磁器類（第 11 図～第 15 図、第 2 表、図版 7～図版 9）

第 11 図 A と第 11 図 B は、溝 2（坊城小路東側溝）出土の土器・陶磁器類である。溝 2 から他にも瓦類などが一定量出土しているが、瓦類は次項にまとめている。

溝 2 からは、土師器食器類をはじめ須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの土器・陶磁器類が出土している。量的には、土師器食器類と緑釉陶器類が多く、この両者に比すると須恵器は多くはなく、灰釉陶器ほか黒色土器・白色土器などは極少数にとどまる。土師器の小型食器類は、粗くなっ



第 11 図 A 溝 2 出土土器・陶磁器



第 11 図 B 溝 2 出土土器

てはいるが体部外面から底部をへら削りで仕上げとする、いわゆる C 手法痕跡を持つ段階、平安京 I 期の中から新段階の中相頃に位置付けられるものが主体を成す。脚部を 7 面体でへら削り仕上げする土師器高坏とも時間的な齟齬はない。緑釉陶器の碗・皿類は、釉下にへらミガキを施した削り出しの平高台、蛇ノ目高台のものが多く、同じ削り出しの輪高台のものを一定量含んでいる。緑釉陶器の碗・皿の大半は山城産が占めており、その型式特徴からは平安京 I 期新から II 期古のものを中心としているが、同 II 期古から同 II 期中頃に位置付けら

れるものも一定量は含まれている。時期的には、他の種類のものも含めて、9 世紀中葉頃に位置付けられるものを中心にして、9 世紀後半代に位置付けられるものが続いている印象がある。それらは第 11 図 A に組んで提示した。なお、最上層ともみられる上位層からは、9 世紀末から 10 世紀前半頃に位置付けられる土器が少量ながら出土する。

第 11 図 A-1 ～ 9 は、土師器食器類である。1 は碗 A、2 は坏 A I、3 は皿 A II、4 ～ 6 は皿 A I である。これらは e-c とも称される粗い C 手法で仕上げとしている。各器形ともに、それぞれ体部から口縁部にかけての外方への開きが強くなっている点や、粗い C 手法仕上げである点などから I 期新に位置付けられる。7 は底外に部分的なへら削り痕が見られるが、ほぼオサエとナデのみで仕上げたと見てよい皿 A I である。摂津あるいは河内からの搬入品と見ている。I 期新から II 期古の幅には収まる。脚を 7 面体に削り仕上げした土師器高坏は、平安京 I 期～ II 期古頃の幅でみておく。

10 ～ 22 は、緑釉陶器の碗・皿類であり、釉厚は薄いものが主で、釉下にはへらミガキが施されたものがほとんどである。その内の 10 ～ 17 は、削り出しの平高台を持った碗・皿である。I 期新～ II 期古の幅には収まる。18 ～ 20 の内 19・20 は、削り出しの蛇ノ目高台の碗である。18 は、口縁部の特徴などからは山城産の削り出しの平高台、あるいは蛇ノ目高台を持つ可能性が高い。時代は、先の削り出しの平高台と若干新しい方へ幅を持って大きく重なる。21・22 は、高台の端部幅に差異はあるが、それぞれともに削り出しの輪高台である。これらは削り出しの輪高台ではあるが、釉下には粗いへらミガキが確認出来る。年代は II 期古～中の 9 世紀後半の内に位置付けておく。

23 は、須恵器の小壺 (M) で、底外は回転系切り痕を残す平高台的な底部である。24 は、輪高台が付く中サイズの須恵器壺の下半部である。23 は、9 世紀中葉～後半、24 は、9 世紀前半頃を中心位置付けておく。

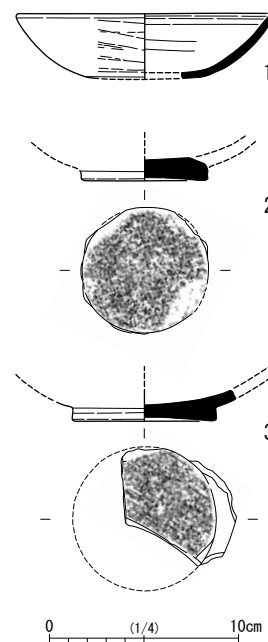
第 11 図 B に掲載した須恵器鉢の 1 は、9 世紀後半～ 10 世紀前半頃に位置付けられる。また 2 は丹波篠産の、三角玉縁の特徴的口縁を持った須恵器鉢であり、10 世紀前半頃のものである。

少数掲載したこれらの資料は、主に坊城小路の東側溝である溝 2 の構内堆積土の上層部から出土している。礫敷の路面は機能が維持されているようだが、東側溝の当調査地内のこの付近は、平安時代中期の早い段階には、かなり埋没が進んでいたことを示しているとしている。

第 12 図に掲載した遺物は、少数だが溝 3 とした坊城小路の西側溝から出土したものである。他に須恵器片も出土しているが、攪乱的削平を受けている部分が多かったことによるのか、出土遺物量は極少数にとどまる。

1 は、土師器碗 A である。口径は 13.6cm を測り、器高も 3.45cm と深さを残している点などからは、法量や形態的には I 期中の新相から I 期新の古、あるいは同中の幅の中に位置付けられる。外面に残る C 手法によるヘラケズリも若干粗くなっており、その位置付けを示している。

2 と 3 は、削り出しの平高台を有した山城産の緑釉陶器碗の底部片である。高台径は、2 が径 6.7cm、3 が 7.6cm を測り、2 は中碗、3 は大振りの碗の底部と見られる。鉛釉である緑釉は全面に施釉されているが、薄手で素地の色を反映しており、淡緑灰（褐）色を呈する。釉下器表には、ほぼ全体的にヘラミガ

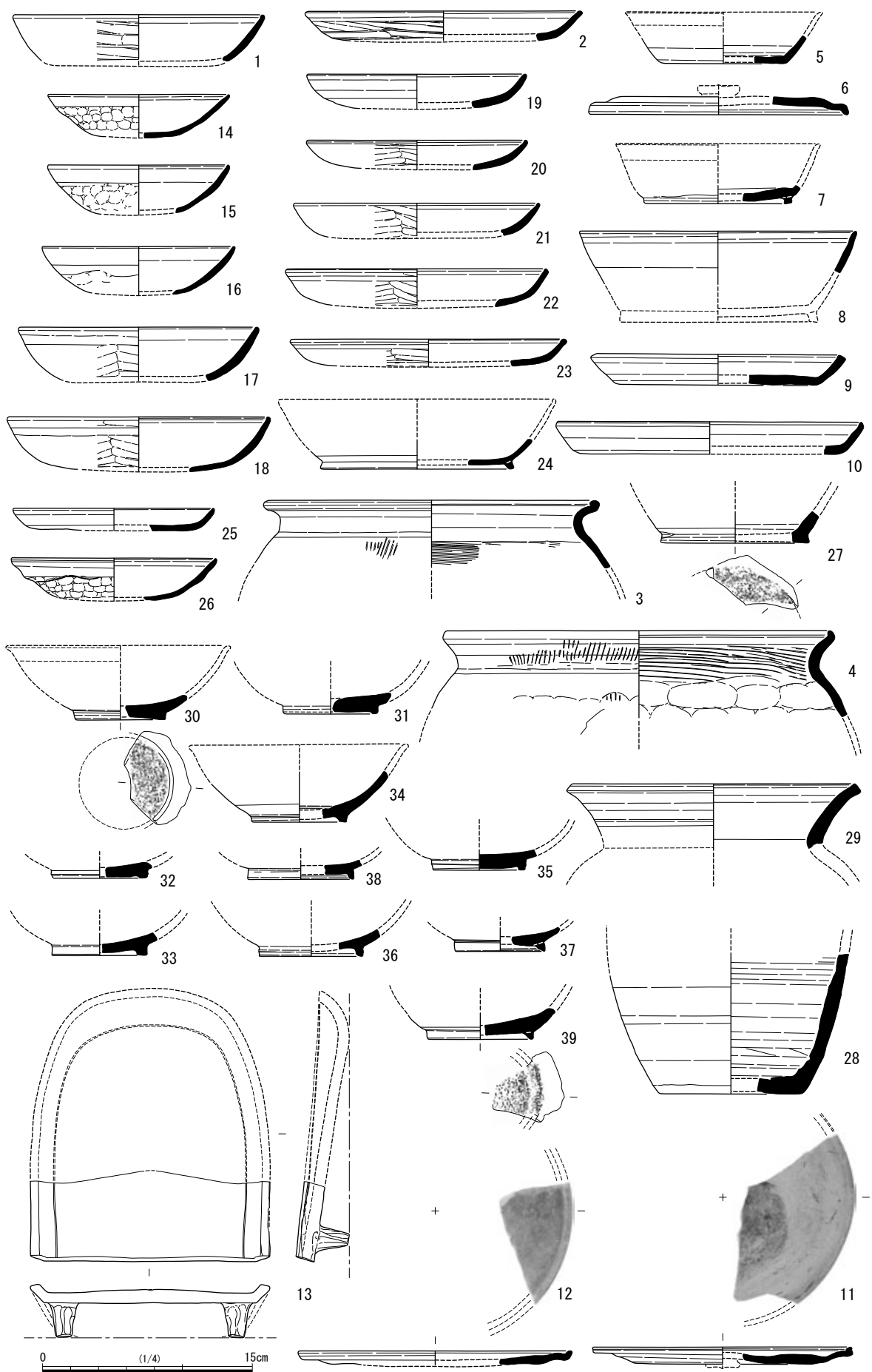


第 12 図 溝 3 出土土器・陶器

キ痕が残る。形式的には I 期新に収まると見ているが、少し II 期古へかけて見る方が、論理的には妥当だろう。土師器碗 A および緑釉陶器碗は、消費と廃棄は少し下る可能性はあるが、生産と搬入年代は、平安時代前期の内でも 9 世紀前半の幅のうちに収まるだろう。なお 2・3 ともに底外面となる高台裏に、釉の上から釘先描きの線彫りによる文字の残欠が認められるが、遺存状態が悪いため判読は控えておく。なお調査地からは、地下鉄東西線建設に伴う神泉苑内の発掘調査から出土したものと、同形式の山城産の削り出し平高台を持つ緑釉陶器碗が出土しており、高台裏面には同様に、緑釉の上から釘先状工具による「木屋」と線彫りされている。形態・技法痕跡・釉調などすべての型式特徴を共有する資料であり、今後両者とその他資料も合せた総合的研究が必要であろう。

第 13 図 A と B に掲載した資料は、坊城小路の西辺より以西で、調査区外の北・西・南の三方へ広がる湿地とした遺構内の堆積土、あるいは埋土の可能性が高い土層から出土している。第 13 図 A は、上層出土なども含むが中層および下層から出土したものが主体であり、平安時代前期のものが主体を成す。量は少なくなるが、同中期に比定出来るものを合せて掲載したが、これらは中層（の上部か）からの出土が主である。第 13 図 B は、埋土の可能性の高い最上層からの出土品を主とするが、上層からの出土品も含んでいる。第 2 表で人力掘削と表記したものに上層と見られるものが含まれている。

このような遺物出土状況からは、下層から中層が堆積する前期から中期にかけて、湿地内に土器の廃棄が続き、同中期に入ると量的に減少傾向を示す。同中期以降は、調査地周辺の土地利用が大きく変化するためか、廃棄物的遺物がより少なくなる。しかし、上層から最上層では、混入品的な平安時代前期の遺物も少なくないが、平安時代後期から鎌倉時代初の前半頃に比定出来る土器・陶磁器類の出土が、若干ながら増加する。このような事から、平安時代後期には湿地の埋



第 13 図 A 湿地中～下層出土遺物

没は、上層部まで自然的にかなり進んでいるようであり、湿地的状態は続いていたと見られる。最上層は、土質的には埋土の可能性が高いが、上層から最上層の出土遺物は、平安時代末期から鎌倉時代前期頃に比定出来るものが下限に位置している。したがって、この頃に湿地（の湿田）的土地利用から乾田、あるいは水田的土地利用へ変わっていくものと見てよいだろう。鎌倉時代以降中世から近世、あるいは近代まで同様の耕作地的土地利用が継続するようである。以下では、土器・陶磁器の個々の説明を記してゆく。

第13図Aの1は土師器坏A大である。体部外面のc手法によるヘラケズリや、体部の立ち上がりの強さが示す形態からは、湿地構内から出土した土師器食器の内では最も古相を持っており、平安時代初頭のI期中（～同新古）に収まる可能性も高い。2は、同じくC手法の土師器皿A大、3・4とした土師器甕は、1と並ぶかあるいは少し後までの幅（I期中新～I期新まで）の中で位置付けておく。なお、3・4とした土師器甕は両者ともに体部外面に使用痕である煤の付着が認められる。

5～10は、5が須恵器坏A、6は同坏B蓋、7・8は同坏B身、9・10は同皿C小の中と大である。これらの須恵器食器は、I期中の新からI期新型式の幅には収まる。

11・12は、器形的には須恵器の坏B蓋であるが、天井内面は墨を磨ったことによる器表面の磨滅が進み平滑となっており、墨痕もよく残っている。この転用硯とも言える11・12に関しては、体部全体の扁平化に比して、天井部内面は、ろくろ目が目立たない程度には仕上げており、製作時から硯としての使用を前提とした坏蓋硯であったと見ている。産地は、堺の陶邑か陶邑の系統に属する近畿地方の窯であろう。

13は、底部外面から脚に灰釉系の自然釉がかなり厚く被る。硯面の保護のため、天地を逆転させて焼成している。器形的には、棒状の短い脚が付し、須恵器のいわゆる風字硯である。硯面の磨滅は、上部片のためか不明瞭である。ボディの胎土や自然釉の様相からは、尾張猿投産の可能性も高い。

これら11～13の3点以外にも、小片であるが円面硯や坏蓋硯になるものが出土している。これらは平安時代前期には比定出来る。またこの時期の硯片は、小片ならば溝2ほかや上層への混入品としても出土している。1点だけだが、黒色土器B類の小振りの風字硯片の出土も確認している。上述の3点を含む須恵器や黒色土器B類の硯は、全体の出土遺物の中に占める割合はかなり高い。年代的にはこれらの陶硯あるいは土器硯は、ほぼすべてが平安時代前期には収まる。

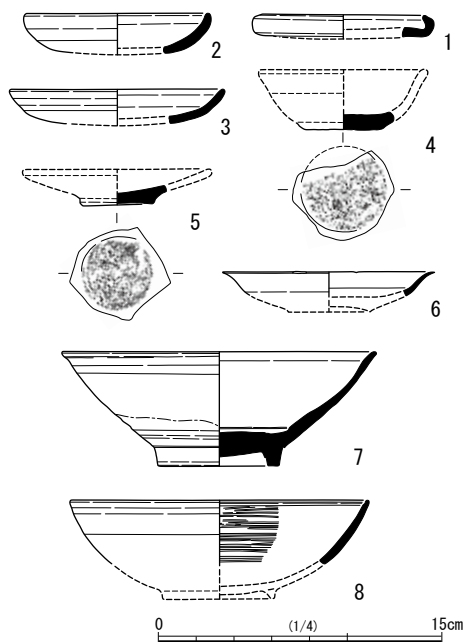
14～26は、土師器食器類である。14～16は、体部外面におさえ痕を残したままで仕上げており、埴Nと見ておく。17・18は坏A大、19・20は皿A小で、19は底外のみを削るb手法で仕上げとしていると見られる。21・22は浅い坏の可能性を残すが、皿Aの大に括っておく。23も皿A大である。17～23の土師器食器類の内、底外面のみをヘラケズリした、いわゆるb手法と見られるもの以外の土師器食器類は、ほぼすべてが外面全体をほぼヘラケズリする、いわゆるc手法で仕上げたものである。24は土師器坏Bの身である。14～24の土師器食器類は、I

期中新からⅠ期新には収まり、平安前期（の前半）に位置付けられる。25は皿A小、26は坏Aである。ともにオサエとナデで仕上げとしており、Ⅱ期古から中の9世紀後半頃に位置付けられる。

27～29は陶器系の須恵器である。27は、底部外面に糸切り痕を残す須恵器鉢の底部である。28は、須恵器壺の体部下半から底部である。29は須恵器の小振りの甕の口縁部である。いずれも時期的には平安時代前期には収まるものと見ている。

30～38は、緑釉陶器の碗と見ているが、32と38は皿の可能性が残る。30は削り出しの平高台である。31～37はすべて削り出しの輪高台である。30～37はその製作技法と胎土、釉調などから山城産、あるいは山城系の口丹波の篠産である。35～37は、山城の大原産か篠産かの判断は難しい。30は、釉下のヘラミガキに丁寧さを残す。古相を呈し、平安時代前期の9世紀中葉頃には収まる。この平高台の底部外面にも、線刻の文字と見られる一部が残る。31～36は、釉下のヘラミガキが粗くなったものが多くなっている点に加えて、高台の直径が少し小型化し、体部下部の開きが大きくなり、碗形化が平高台のものより進んでいることが判る資料が含まれるようになっている。削り出しの輪高台の碗皿の中心時期は、削り出しの平高台より半世紀ほど新しい時期に下がる。これらの削り出し輪高台の推定年代は、9世紀後半から10世紀前半頃を中心とするものと見ておく。37は、断面が三角形を呈した貼り付け高台を持つ緑釉陶器碗である。釉下のヘラミガキは施されているようだが、釉厚がやや厚めで不明瞭である。高台形態や、やや濃い釉色などからは美濃産と見られ、平安時代前期末から中期初め頃となる。10世紀前半頃に位置付けておく。

38は、ろくろ成形で削り出しの輪高台が付き、内外の器表面はヘラミガキが施されているようである。先の山城産緑釉陶器のボディと、製作技法および結果形態がほぼ共通している。しか



第13図B 湿地最上層（埋土か）出土遺物

し、釉は掛けずに白色の素焼き的な仕上げとなっており、白色土器に属するものと見ている。推定年代は、削り出しの輪高台31～36の推定年代幅の内の古い側の、9世紀中頃から後半の平安時代前期後半頃に収まるものと見ておく。

39も、断面三角形を呈する貼り付け高台を持ち、高台内の底部外面には回転系切り痕を残す。内面の一部に灰釉が確認でき、製作技法や高台を含む結果形状などからは、平安時代中期の中頃から後半となり、10世紀後半から11世紀前半頃の内には位置付けられる。東海産の灰釉陶器碗の体部下部から底部と見ている。

第13図Bの1～3は、手づくね成形であり、主にオサエとナデで仕上げられており、いずれも京域

主流派に属する土師器小型食器類である。1は皿Ac、2は皿N小、3は皿N中である。型式的には2・3は、V期中から新の12世紀前半から中頃に位置付けられるが、1はやや下がるV新～VI古の12世紀後半頃に位置するものと見ている。

4・5は、白色土器であり、4は小坏、5は皿である。ろくろ成形で製作されており、両者ともに小径の平高台とされ、底外面に回転系切り痕を残す。推定年代は、12世紀末から13世紀前葉頃の鎌倉時代前期頃と見ておく。

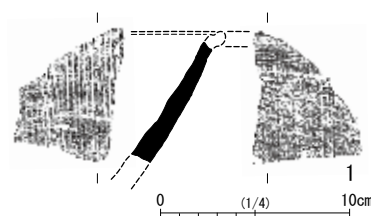
6は、中国宋からの輸入陶磁器の青白磁皿である。小振りながらかなり薄作りの良品であり、本来的には口縁端部は輪花であったと推測している。

7は、6と同様に輸入陶器であり、こちらは白磁碗である。内面の見込み周縁部は、幅は狭いが重ね焼き用に、釉を輪状に削り取っている。年代的には、11世紀末から12世紀の平安時代後期頃の幅に収まるものと見ている。

8は、瓦器の埴である。口径は15.8cmと大きさを残すが、体部から口縁部の外面にはヘラミガキが認められず、内面のヘラミガキも隙間が生じてきている。ボディもやや華奢になっており、12世紀後葉頃から13世紀前半頃の幅の中で見ておきたい。生産地は大阪府枚方の樟葉である。

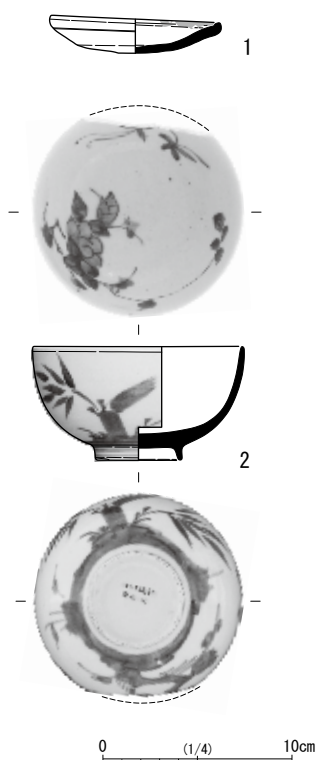
第13図Bに湿地の最上層から上層出土のものを中心にとめた土師器、白色土器、輸入陶磁器、瓦器の食器類は、先述しているように湿地上層から中・下層で主体を成す平安時代前期から同中期前葉頃のものに比べると、150～200年ほど新しく位置付けられるものが中心的である。湿地的地形は、これらの土器群の下限が示す12世紀末から13世紀前葉頃の鎌倉時代初め頃には、失われていったものと見てよいようである。

第14図1は、焼き締め陶器播鉢の体部上部から口縁部下半の破片である。口縁端部は欠損しているが、隙間のある五本櫛目の播目や、ろくろの回転ナデの成形痕跡、口縁端部へ向けた器壁の華奢化、加えて焼成後のボディ内外の赤褐色の色調を含む焼き上がり結果などから、16世紀末から17世紀前葉頃の信楽産の播鉢であるといえる。口縁



第14図 溝1出土焼き締め陶器

端部は、点線復元したように断面形状が小さな玉縁状に収められているものとほぼ断定的に理解してよいだろう。溝1は、調査区東辺を南北に延びる道路状遺構の西側溝的機能を持つ溝と考えている。この溝内堆積土からは、信楽播鉢片の他に、凹面に棒状のタタキ痕を残す丸瓦なども少数出土している。この丸瓦も桃山時代から江戸時代初頭の16世紀末から17世紀前半頃には比定出来る。これらの出土遺物から、溝1は江戸時代初め頃には形成されており、早めに機能を失う溝と見られる。北東近接地に徳川の二条城が築造され、築造に伴い城の南西部が整地され、京都町奉行所やその関連施設が建設されることが、地図資料などから明らかとなっている。今回の検出および調査した道路状遺構と、その西辺に南北に沿うように設けられた溝1は、徳川の二条城の建設と城の周辺部の町並み整備に伴うものであることを、出土遺物も齟齬なくよく示している。



第 15 図 近世整地土層出土遺物

第 15 図に 2 点示した資料は、近世整地層から出土したものである。1 は、京城主流派に属する土師器皿 sb である。内面の見込み周縁に凹状圈線を持たない s 型式では最も小径に位置する。口径が 9.1cm 程で、少し厚手感を残すが、口縁端部内面の端面はかなり不明瞭となっている。型式的には XII 古から中の古い方を中心に若干前後に幅を持たした、17 世紀後半（少し 18 世紀にかかるか）に位置付けておきたい。

2 は、井戸 1 から出土した伊万里の染付碗であり、口径 11.2cm、器高 6.0cm、底部高台径 4.6cm を測る。全体に薄作りで、呉須による文様も丁寧であり、良品である。製作年代は、17 世紀後半から 18 世紀頃の幅の中で見ておく。しかし、井戸 1 は漆喰を多用しており、井筒内埋没土からは江戸時代後期以降の棧瓦も多く出土している。これらのことからこの染付碗は、江戸時代の早い段階で購入されて、長い伝世的使用期間を経た後の幕末、あるいは近代に入って後に井戸 1 とともに廃棄されたものと理解すべきだろう。

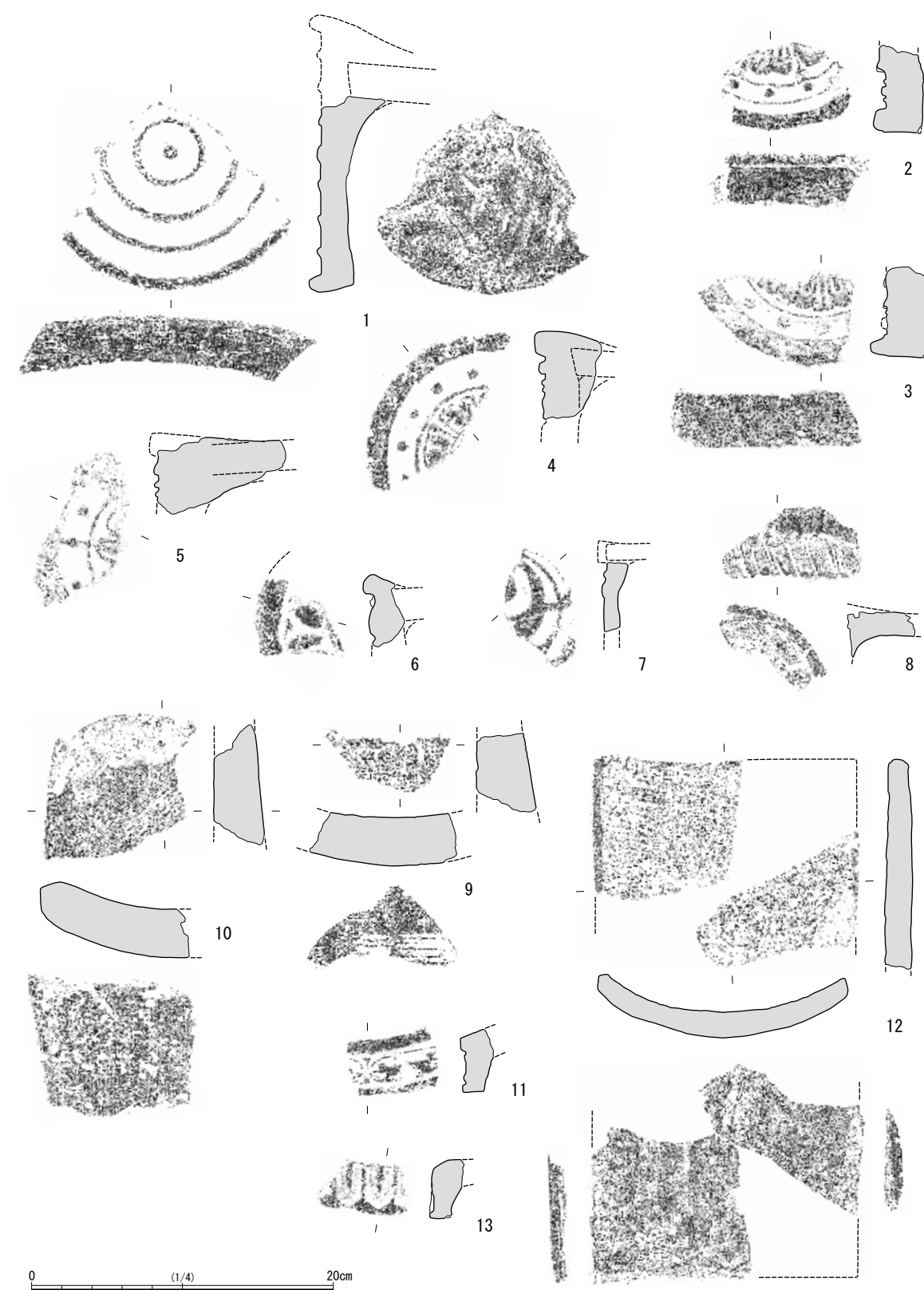
2. 瓦 類（第 16 図～第 18 図、第 2 表、図版 9・図版 10）

今回の調査で出土した平安時代の瓦類の量はコンテナバット 2 箱分ほどである。破片数にして約 70 片で、全体の大きさがわかるものはなく、ほとんどは小片であった。破片でのおよその年代の割合は、搬入瓦を含めた前期段階の瓦が 50%、10～11 世紀前半の中期段階の瓦が 20%、後期段階の瓦が 30% であった。出土地点別の割合は、東寄りの（溝 2）周辺から 33%、西寄りの（湿地帯）周辺からは 67% となる。

瓦類の種類には軒丸瓦・軒平瓦、丸瓦、平瓦があり、道具瓦の類は認められなかった。以下、主な瓦類について記述していく。

軒瓦（第 16 図、図版 9・図版 10）

第 16 図 -1 は、重圈文の軒丸瓦で、中央に珠点があることから平城宮 6012 型式とみられる。瓦当周囲と裏面はケズリ調整を施す。胎土にはあまり砂粒を含まず、やや軟質の焼成で表面は黒色、内部は灰白色を呈する。2～4 は複弁蓮華文の軒丸瓦である。2 は内外区の界線が花卉に沿って波状に表されていることから、中房に「大伴」銘のある軒丸瓦かと思われる。瓦当周囲に明瞭に枷枠の痕跡を残す。瓦当裏面は指オサエで調整されている。胎土には粗い砂粒を含み、やや硬質の焼成で全体に灰白色を呈している。（湿地帯）出土。3 は周縁の内側が内曲することと花卉の特徴から、西寺系の軒丸瓦と見られる。瓦当周囲に微かに枷枠の痕跡が認められる。胎土には白色粒の目立つ砂を多く含み、やや軟質の焼成で表面は黒色、内部は淡灰褐色を呈する。



第 16 図 軒瓦

B・C-5 区出土。4 は小振りの複弁蓮華文で、外区に大粒の珠文を巡らす。胎土には砂粒を含み、やや軟質の焼成で表面は黒色、内部は灰黒色を呈する。(溝 2-1) 出土。5 は単弁蓮華文になろう。花卉から周縁にかけて範傷がある。胎土には砂粒を多く含み、軟質の焼成で、表面は淡灰褐色、内部は黒色を呈している。(湿地帯) 出土。以上は 8～9 世紀段階の軒丸瓦である。

6 は 11 世紀前半代とみられる単弁蓮華文の軒丸瓦である。瓦当周囲は指オサエ調整で凹凸が目立つ。胎土には砂粒を含み、やや軟質の焼成で、瓦当面は黒色、その他は灰色を呈する。C-1 区(土坑 6) 出土。

7 は 12 世紀後半代の巴文軒丸瓦で、瓦当面には大きな範傷があり、その部分で少し段差がついている。瓦当部は薄く、瓦当裏面は指オサエ調整である。胎土に細かい砂粒を含み、やや軟質の焼成で瓦当面が灰黒色、その他は淡灰褐色を呈している。A-2・3 区(湿地帯) 出土。

8 は瓦当部を失う軒丸瓦で、瓦当と接合する丸瓦先端部の破片である。かなり薄い丸瓦で、端部の凹凸両面に斜めに深い刻線を入れている。平安時代の一般的な造瓦技法では、瓦当と丸瓦の接合の際に刻線を入れる例がほとんどないため、年代や産地が推定し難い。ただし、丸瓦の厚みなどから前期段階の瓦ではないと思われる。胎土にはあまり砂粒を含まず、硬質の焼成で灰白色を呈している。C-1・2 区出土。

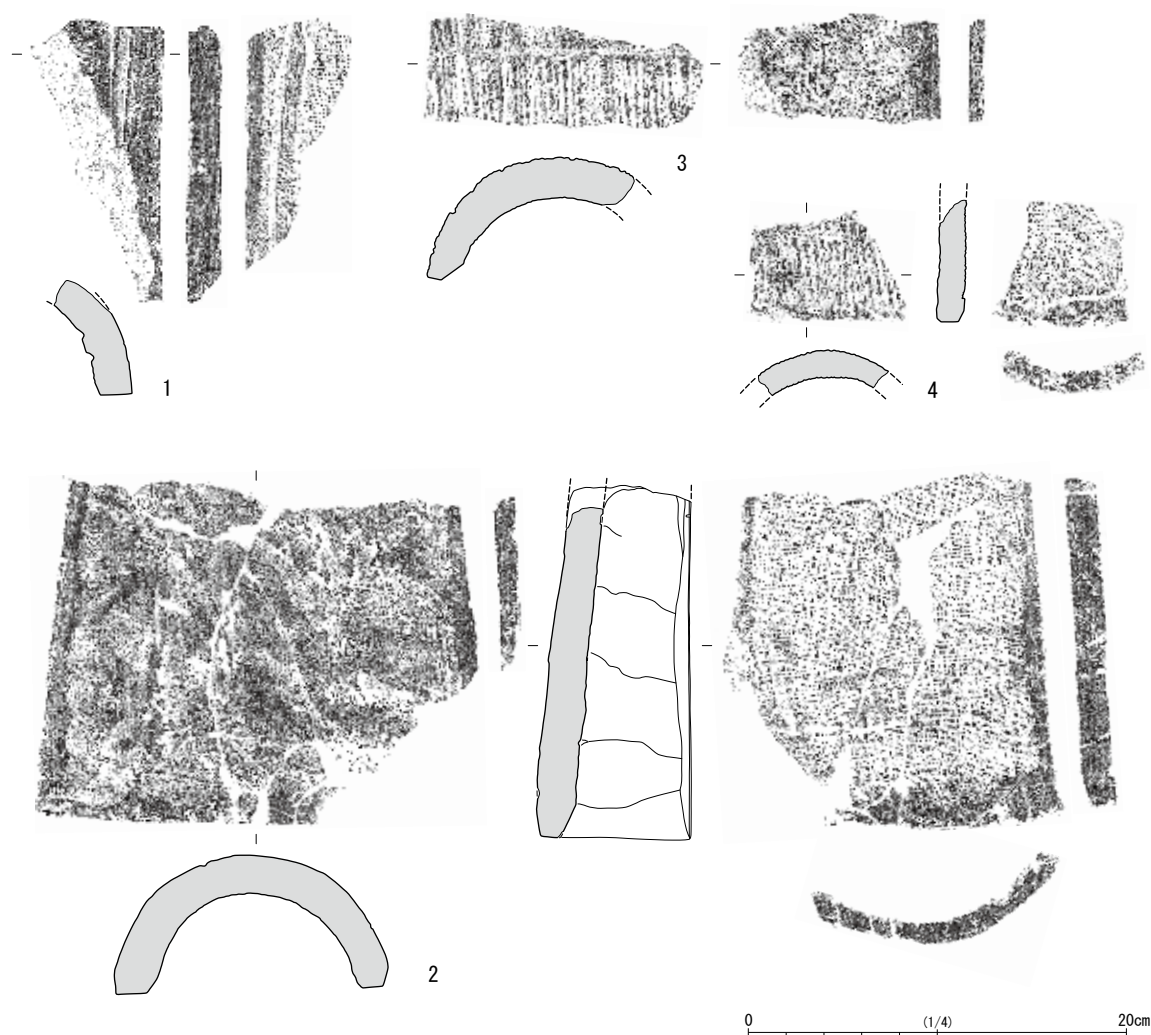
9 は軒平瓦の平瓦部の小片である。瓦当文様はわからないが、厚みや凸面の横方向の縄目タタキ痕から 8 世紀末頃の瓦とみられる。胎土に細かな砂粒を含むが多くはない。軟質の焼成で凸面は黒色、その他は灰～灰褐色を呈している。(溝 2-1) 出土。10 は厚みや凸面のナデ調整痕から軒平瓦の平瓦部片としたが、凹面に布目と糸切り痕があり、平瓦の可能性もある。いずれにしても 8～9 世紀代の瓦と思われる。胎土には粗い砂粒を含み、やや軟質の焼成で表面は灰色、内部は灰黒色を呈する。C-1・2 区(湿地帯) 出土。

11 は蔓が延びる宝相華文を横に連ねたような文様で、範の彫りは比較的精緻である。瓦当の顎部は縦方向のナデ、瓦当部分の上下はケズリ調整されている。胎土には細かい砂粒を含むが多くはない。やや軟質の焼成で表面は灰白色、内部は黒色を呈する。12 は 11 と同一個体の可能性が高い軒平瓦の平瓦部片で、胎土や色調などが共通している。凹面の布目痕は、通常の平織りではなく、約 1cm 角の石畳(市松)模様を織出した布の圧痕になっている。凸面は縦方向のナデ調整で、端部の一部に凹面と同じ布目痕が付く。布はおそらく古着の類の再利用であろう。このような布目の例は、ごく少数ながら栗栖野瓦窯産など 12 世紀代の平瓦・軒平瓦に認められる。11・12 とも(湿地帯) 出土。

13 は剣頭文の軒平瓦である。瓦当の顎部は縦方向の指オサエ、瓦当部分の上下はケズリ調整されている。胎土には細かい砂粒を含むが多くはない。軟質の焼成で表面は灰黒色、内部は灰色を呈している。B-4 区出土。

丸瓦(第 17 図、図版 10)

第 17 図-1 は平安時代前期と見られる丸瓦である。凸面はナデ調整、側端面はケズリ調整で仕上げられている。凹面には側端寄りに布の合わせ目があり、少し間が空いており、その部分には



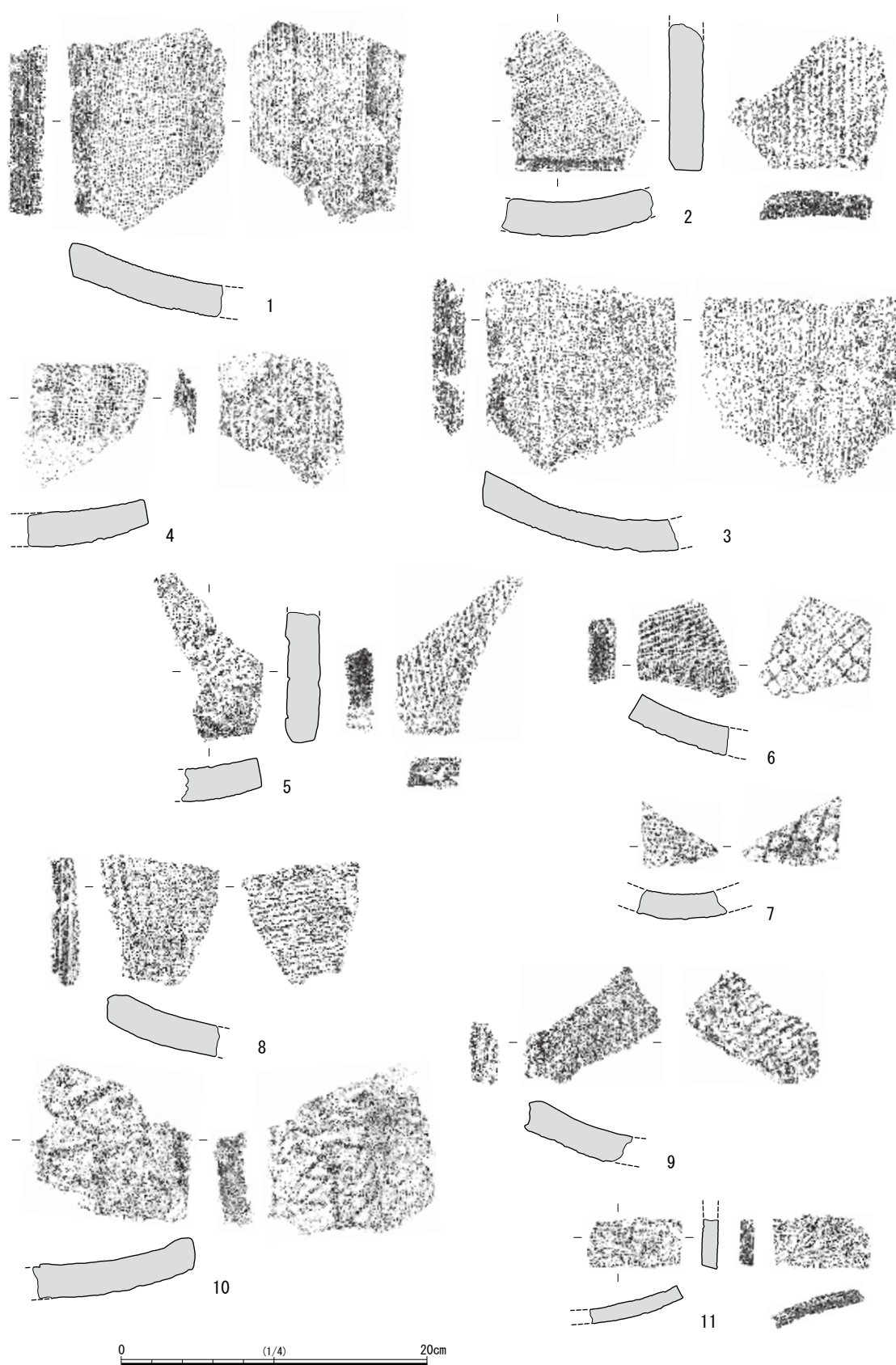
第 17 図 丸瓦

糸切り痕が認められる。胎土には砂粒を含むが多くはない。やや硬質の焼成で、表面は黒～灰色、内部は灰色を呈する。C-3 区（井戸 1）出土。

2 は端部から半分程度残る丸瓦である。端部の幅が広く、徐々に狭まっていくもので、行基葺式の丸瓦と見られる。成形も粘土紐の巻上げで、凹面側に布目痕とともに粘土の継目痕が 4cm 前後の幅で認められる。凸面は不定方向のナデ調整で部分的にはケズリも加えられ、やや凹凸が目立つ。胎土に砂粒を含むが多くはない。やや軟質の焼成で全体に淡灰褐色を呈する。平安京周辺の造瓦所では原則的に行基葺式の丸瓦は生産しておらず、この丸瓦は 11 ～ 12 世紀頃に平安京にもたらされた所謂地方産瓦の可能性がある。A-2・3 区出土。

3 は凸面に明瞭な縄目タタキ痕のある丸瓦である。凹面の布目はかなり織目が細かく整ったものである。胎土には白色粒の目立つ砂粒を含み、硬質の焼成で表面は灰黒色、内部は淡赤褐色を呈している。これも 2 と同様に地方産瓦とも考えられる。C-1・2 区（湿地）出土。

4 も凸面に明瞭な縄目タタキ痕のある、12 世紀代と見られる丸瓦である。やや小型の薄手で、凹面端部に布端の圧痕がある。胎土は縞状で砂はあまり含まない。硬質の焼成で全体に灰色を呈している。（溝 2-1）出土。



第 18 図 平瓦

平瓦（第 18 図、図版 10）

第 18 図 -1 ～ 3 は 9 世紀代の平瓦と思われる。いずれも凸面は縦方向の縄目タタキがなされており、凹面には粗い布圧痕がある。胎土にはかなり粗い砂を含み、硬質の焼成で概ね灰色を呈している。また、2・3 は凹凸両面に糸切り痕が見え、1・2 は凸面のタタキに、これも粗い離れ砂を用いている。1 は C-3 区（井戸 1）、2・3 は A-2・3 区の出土である。

4 は 10 世紀代かと思われる平瓦である。凹面の布目はかなり粗い。凸面は縦方向の縄目タタキで粗い離れ砂を多く用いている。胎土にはあまり砂粒を含まず、硬質の焼成で灰色を呈している。（溝状遺構 1）出土。

5 は 11 世紀にかかる時期の平瓦と思われる。凸面は縦方向の縄目タタキで、離れ砂を用いている。凹面は不定方向のナデがなされており、残存部分では布目が認められない。胎土に小石を含む粗い砂を混える。凹面のナデは、生瓦を成形台から外し、布を剥がした後に凹面の小石やその空隙を調整したもののようなものである。焼成は硬質で、灰色を呈している。C-1・2 区（湿地）出土。

6 は凸面に細かい斜格子文を入れた縦長タタキ板で、密にタタキを施した平瓦である。10 世紀代に平安京にもたらされた北九州産瓦と見られる。側面はケズリ調整されているが、凹面寄りに僅かに分割刻線の痕が認められる。胎土には白色粒の目立つ砂粒を含み、硬質の焼成で表面は灰色、内部は灰黒色を呈している。7 も凸面に斜格子文タタキを施した平瓦で、小片のため詳細はわからないが、これも北九州産瓦かも知れない。C-3 区（井戸 1）出土。

8・9 は凸面の扇状の縄目タタキの様子から、11 ～ 12 世紀代に平安京に運ばれた讃岐産の平瓦と考えられる。8 のタタキ目は比較的細い縄で、9 は太い縄のタタキ目である。また、8 の凹面には細かい布目が認められるが、9 の凹面は磨滅のため布目が見えない。8 は胎土に細かい砂粒を含むが、9 はあまり多くない。8 は硬質、9 はやや硬質の焼成で灰色を呈する。8 は（溝 2-1）、9 は B・C-5 区の出土。

10 は凸面に斜格子文のタタキを施した平瓦で、凹面にも別の斜格子文のタタキ痕がある。凹凸両面とも糸切り痕が認められるが、凹面に布目痕は見えない。胎土は、粗い砂・小石を含み空隙も目立つ粗雑な感を受ける。やや軟質の焼成で灰色を呈し、凸面と側面の一部は黒色である。格子タタキや胎土の様子などから 11 世紀以降の瓦かと思われる。A・B-1・2 区出土。

11 はかなり薄手の平瓦である。凸面は縦方向の縄目タタキがなされているが、離れ砂が多く不明瞭になっている。凹面の表面にも砂粒が目立ち、一部に布目が見える。また、凹凸両面とも横方向の糸切り痕も認められる。胎土は縞状で砂はあまり含まない。厚さや糸切り痕の様子などから、12 世紀代の瓦と考えられる。B・C-5 区出土。

第2表 出土遺物観察表

土器・陶磁器類

押図番号 掲載番号	図版 番号	地区・遺構 層位	種類・器形 (型式名)	法 量 (口径φ、器高H 残存値には 残)	色 調	胎 土 粗・密や含まれる岩石・鉱物の 大きさ(φ ※mm以下など)と量	焼 成	残 存 率 口縁 % など	備 考
第11図A 1	7	溝2-1(中層)	土師器 埴A	(φ13.6) (H2.5)	にぶい橙	密 赤色粒少し	良	口縁 8%	ケズリc手法(e-c)
第11図A 2	7	溝2-1(中層)	土師器 埴A I	(φ17.0) (H2.6)	にぶい橙 外面下部橙	密	良	口縁 5%	ケズリc手法(b手法に近い)
第11図A 3	7	溝2-1(中層)	土師器 皿A II	(φ15.4) (H2.1)	にぶい褐	密 金雲母 赤色粒	良	口縁 10%	ケズリc手法
第11図A 4	7	溝2-1(中層)	土師器 皿A I	(φ17.2) (H1.9)	にぶい橙	密 金雲母 赤色粒少し	良	口縁 12%	ケズリc手法(e-c)
第11図A 5	7	溝2-1(中層)	土師器 皿A I	(φ17.4) (H1.7)	にぶい褐	密 金雲母 赤色粒	良	口縁 9%	ケズリc手法 e-c
第11図A 6	7	溝2-1(中層)	土師器 皿A I	(φ18.0) (H1.9)	にぶい赤褐	密	良	口縁 6%	
第11図A 7	7	溝2-1(中層)	土師器 皿A I	(φ17.6) (H1.6)	にぶい橙	密 赤色粒少し	良	口縁 6%	ケズリb手法
第11図A 8	7	溝2-1(中層)	土師器 埴B	(底φ8.4) (H2.2)	橙	密 金雲母 赤色粒	良	高台 17%	
第11図A 9	7	機械掘削 試掘トレンチ	土師器 高坏 脚部 7角	一(脚部のみ)	にぶい橙	密 2mm以下の石粒を含む	良	—	
第11図A 10		2面目 (ベース面か)	緑釉陶器 皿 削り出し平高台	(φ12.8) (H1.45)	胎土灰白 釉極うすく口縁に緑彩	密	やや良	口縁 14%	
第11図A 11	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 皿 削り出し平高台	(φ14.0) (H2.0)	胎土灰白 緑釉	密	良	口縁 11%	
第11図A 12	7	道路状遺構1 基礎整地土層	緑釉陶器 皿 削り出し平高台	(φ13.5) H2.5	胎土灰白 釉うすい黄緑	密	やや良	口縁 6% 高台ほぼ完形	
第11図A 13	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 平高台	底φ7.0 (H1.6)	胎土浅黄橙 釉黄色に近い緑	密 1mm以下の石粒を含む 赤色粒少し	良	高台 60%	
第11図A 14	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 平高台	底φ7.2(～7.3) (H1.4)	胎土灰白 釉黄緑	密	良	高台 ほぼ完形	
第11図A 15	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 削り出し平高台	(底φ7.4) (H1.3)	胎土灰白 釉うすく白い緑か	密 1mm以下の石粒を少し含む	良	高台 25%	山城
第11図A 16	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 皿か 平高台	底φ7.0 (H1.4)	胎土灰白 釉白くうすい緑	密	良	高台 80%	底部外面に文字 拓本
第11図A 17	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 削り出し平高台	(底φ7.4) (H2.25)	胎土灰白 釉黄色に近い緑	密	良	高台 30%	底部外面に文字 拓本 山城
第11図A 18		溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴	(φ16.0) (H2.5)	胎土灰白 釉白くうすい緑	密	良	口縁 9%	
第11図A 19	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 削り出し蛇ノ目高台	底φ7.8 (H2.0)	胎土灰白 釉黄緑	密	良	高台 53%	山城
第11図A 20	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 皿か 削り出し蛇ノ目高台	(底φ7.2) (H1.4)	胎土灰白 釉黄緑	密	良	高台 22%	山城
第11図A 21	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ5.8) (H1.7)	胎土にぶい黄橙 釉黄緑	密 軟	良	高台 15%	釉の下に1次の重ね焼き痕 山城
第11図A 22	7	溝2-1(中層)	緑釉陶器 皿か 削り出し輪高台	(底φ5.7) (H1.6)	胎土灰 釉淡い灰緑	密 硬	良	高台 38%	釉の下に1次の重ね焼き痕 高 台の内側に墨付着 硯か 山城系
第11図A 23	7	溝2-1(中層)	須恵器 壺M	底φ4.3(～4.4) (H5.8)	灰	密 1mm以下の石粒 黒色粒と赤色粒少しずつ含む	やや良	底部 66%	底部糸切り 拓本 9c後半
第11図A 24	7	道路状遺構1 基礎整地土層	須恵器 壺	(底φ11.6) (H19.0)	表面灰 胎土灰白	やや密 3mm以下の石粒を含む	やや良	高台 22%	
第11図B 1	7	溝2-1(中層)	須恵器 鉢	—	灰	密 2mm以下の石粒 黒色粒	良	—	9c後半
第11図B 2	7	溝2-1(中層)	須恵器 鉢	—	灰白	密	良	—	口丹波 篠産 10c前葉
第12図 1	7	溝3	土師器 埴A	(φ13.6) (H3.45)	にぶい橙	密 1mm以下の石粒を含む 金雲母少し	やや良	口縁 23%	ヘラ カタカケズリ I 中→I 新
第12図 2	7	溝3	緑釉陶器 埴 削り出し平高台	底φ6.7 (H1.2)	胎土灰白 釉うすい黄緑	密	良	高台 50%	底部外面に文字 拓本
第12図 3	7	溝3	緑釉陶器 埴 削り出し平高台	(底φ7.6) (H1.6)	胎土灰白 釉黄緑	やや密 2mm以下の石粒を含む 赤色粒	良	高台 25%	底部外面に文字 拓本
第13図A 1	8	湿地帯下層 C-1・2区	土師器 埴A大	(φ18.0) (H3.3)	にぶい橙	密 金雲母 赤色粒少し	良	口縁 6%	I 新 古相的 9c前葉で収まるか
第13図A 2	8	人力掘削 C-1・2区	土師器 皿A I	(φ19.8) (H2.1)	にぶい橙	やや密 3mm以下の石粒を含む 赤色粒多い 金雲母	やや良	口縁 8%	I 新 古相的 9c前葉で収まるか
第13図A 3	8	湿地帯(下層か)	土師器 甕	(φ24.0) (H4.8)	にぶい黄橙	やや密 4mmの石粒を含む	良	口縁 3%	外面スス付着
第13図A 4	8	湿地帯下層	土師器 甕	(φ28.0) (H6.15)	にぶい黄橙	密 金雲母	やや良	口縁 6%	外面スス付着
第13図A 5		中層 C-1・2区	須恵器 埴A	(底φ9.2) (H2.0)	灰白	密 2mm以下の石粒を含む 黒色粒	やや良	底部 22%	
第13図A 6	8	湿地帯(下層か)	須恵器 埴B蓋	(φ18.6) (H1.3)	灰白 内面にぶい黄橙	密 2mm以下の石粒を多めに含む	良	口縁 10%	2次火を受けている
第13図A 7	8	湿地帯(下層か)	須恵器 埴B 転用硯	(底φ10.6) (H1.3)	灰	密	良	高台 20%	底部外面に墨付着
第13図A 8	8	中層 C-2・3区	須恵器 埴B	(φ19.8) (H3.8)	灰	密	良	口縁 9%	9c
第13図A 9	8	湿地帯(下層か)	須恵器 皿C	(φ18.2) (H2.25) (底φ14.2)	灰白 口縁のみ灰	密	良	口縁 8%	

押図番号 掲載番号	図版 番号	地区・遺構 層位	種類・器形 (型式名)	法 量 (口径φ、器高H 残存値には 残)	色 調	胎 土 粗・密や含まれる岩石・鉱物の 大きさ(φ ※mm以下など)と量	焼 成	残 存 率 口縁 % など	備 考
第13図A 10	8	2層上面 A・B-1・2区	須恵器 皿C	(φ22.0) (H2.3) (底φ18.2)	灰	密	良	口縁 4%	9c前半
第13図A 11		2層上面 A・B-1・2区	須恵器 坏B蓋	(φ18.6) (H1.2)	灰白	やや密 2mm以下の石粒を多めに含む	やや良	口縁 23%	坏蓋硯(ツマミありか) 9c
第13図A 12	8	湿地帯(下層か)	須恵器 坏B蓋	(φ19.6) (H1.0)	灰	密 1mm以下の石粒を含む	良	口縁 16%	坏蓋硯(ツマミなしか)
第13図A 13	8	湿地帯(下層か)	須恵器 風字硯	(残存長5.7 残存巾8.5)	灰	密 硯	良	—	硯面に軸がめつらないように 伏せ焼きしている 東海か
第13図A 14	8	北壁断面下部 B-2区	土師器 埴N	(φ13.0) (H3.1)	にぶい黄橙	密	やや良	口縁 21%	
第13図A 15	8	中層 C-2・3区	土師器 埴N	(φ13.0) (H3.4)	にぶい橙	密 2mm以下の石粒を含む 金雲母	良	口縁 17%	
第13図A 16	8	中層 C-2・3区	土師器 埴N	(φ13.8) (H3.4)	にぶい橙	やや密 4mmの石粒を含む 大きい赤色粒 金雲母	やや良	口縁 12%	
第13図A 17	8	中層 C-2・3区	土師器 坏A	(φ17.2) (H3.8)	にぶい褐	密 金雲母 赤色粒	やや良	口縁 9%	少し粗いc手法
第13図A 18	8	中層 C-2・3区	土師器 坏A	(φ18.8) (H3.9)	橙	密 2mmの石粒を含む 赤色粒 金雲母	良	口縁 7%	少し粗いc手法
第13図A 19	8	中層 C-2・3区	土師器 皿AⅡ (坏Cor皿C系か)	(φ15.7) (H2.45)	にぶい黄橙	密 金雲母	良	口縁 6%	b手法
第13図A 20	8	中層 C-2・3区	土師器 皿AⅡ	(φ15.8) (H2.1)	にぶい黄橙	密 金雲母 赤色粒	やや良	口縁 13%	(e~)c手法
第13図A 21	8	中層 C-2・3区	土師器 皿AⅠ	(φ17.6) (H2.4)	にぶい橙	密 細かい石粒を多めに含む 赤色粒 金雲母	やや良	口縁 9%	(e)c手法
第13図A 22	8	中層 C-2・3区	土師器 皿AⅠ	(φ18.8) (H2.7)	にぶい黄橙	密 1mmの石粒を含む 金雲母 赤色粒少し	やや良	口縁 7%	(e~)c手法 少し粗い
第13図A 23	8	上層 C-1・2区	土師器 皿AⅠ	(φ19.8) (H1.9)	にぶい橙	密 金雲母	良	口縁 8%	(e~)c手法
第13図A 24	8	中層 C-2・3区	土師器 坏B	(φ19.8) (H2.1) (底φ13.8)	にぶい褐	密 細かい石粒を多めに含む 金雲母	良	高台 8%	
第13図A 25	8	北壁断面下部 B-2区	土師器 皿A	(φ14.4) (H1.6)	にぶい黄橙	密 2mmの石粒を含む	良	口縁 17%	
第13図A 26	8	北壁断面下部 B-2区	土師器 坏A	(φ14.7) (H3.05)	灰黄褐	密 2mmの石粒を含む 赤色粒少し	やや良	口縁 45%	
第13図A 27	8	中層 C-2・3区	須恵器 鉢	(φ21.0) (H4.6)	灰	密 2mm以下の石粒を含む 黒色粒少し	良	口縁 8%	底部糸切り 拓本 9c前半か
第13図A 28	8	2層上面 A・B-1・2区	須恵器 壺	(底φ10.4) (H10.0)	灰白	密	良	底部 3%	9c前半
第13図A 29	8	中層 C-2・3区	須恵器 甕	(底φ10.6) (H2.25)	灰	やや密 1mm以下の石粒を含む	良	底部 19%	9c
第13図A 30	8	中層 C-2・3区	緑釉陶器 埴 削り出し平高台	(底φ6.5) (H1.7)	灰白	密 赤色粒少し	やや良	高台 27%	底部外面に文字 拓本 9c中葉
第13図A 31	8	人力掘削 C-1・2区	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ6.8) (H1.5)	胎土灰白 釉うすい青緑	密	良	高台 20%	9c中葉か、山城
第13図A 32	8	人力掘削 C-1・2区	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ6.8) (H1.1)	胎土灰白 釉うすい黄緑	密 赤色粒 軟的	良	高台 20%	9c中葉か、山城
第13図A 33	8	中層 C-2・3区	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ6.8) (H1.6)	胎土灰 釉うすい緑	密 1mmの石粒を含む	良	高台 14%	9c後半 山城
第13図A 34	8	上層 C-1・2区	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ6.8) (H3.6)	胎土にぶい橙 釉うすい緑	密 軟から硬	やや良	高台 32%	黒い斑あり 9c後半(10c初)
第13図A 35	8	中層 C-2・3区	緑釉陶器 削り出し輪高台	(底φ6.6) (H1.4)	にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石粒を含む	良	高台 35%	9c後葉 山科
第13図A 36	8	中層 C-2・3区	緑釉陶器 埴 削り出し輪高台	(底φ7.4) (H1.9)	胎土灰 釉黄緑	密	良	高台 7%	
第13図A 37	8	人力掘削 C-1・2区	緑釉陶器 埴 貼り付け輪高台	(底φ6.4) (H1.7)	胎土灰 釉緑 高台外面にぶい黄橙	密 硯	良	高台 30%	10c前半か 美濃か(近江へ行く前か)
第13図A 38	8	2層上面 A・B-1・2区	白色土器か、埴	(底φ7.6) (H1.3)	灰白	密	良	古代 8%	9c後葉(〜10c初) 山城
第13図A 39	8	人力掘削 C-1・2区	灰釉陶器 埴	(底φ7.6) (H2.2)	灰白	密	良	高台 17%	底部糸切り 拓本 東海 口? 11cへ下るか
第13図B 1	9	人力掘削 C-1・2区	土師器 皿Ac	(φ9.6) (H1.15)	にぶい橙	密 1.5mmの石粒を含む 金雲母	良	口縁 3%	V期(11c末〜)12c
第13図B 2	9	湿地帯	土師器 皿N小	(φ9.9) (H2.1)	にぶい橙	密 赤色粒	良	口縁 11%	V期12c
第13図B 3	9	湿地帯	土師器 皿N中	(φ11.4) (H1.8)	にぶい橙	密 金雲母 赤色粒少し	良	口縁 12%	V期12c
第13図B 4		人力掘削 C-1・2区	白色土器 小坏	(底φ4.5) (H0.95)	灰白 内面と胎土の半分灰	やや粗? 3mm以下の石粒を多く含む	良	高台 65%	底部糸切り 拓本 12c〜13c初
第13図B 5		人力掘削 C-1・2区	白色土器 皿	(底φ3.9) (H6.5)	灰白	密	やや良	高台 ほぼ完形	底部糸切り 拓本 12c〜13c初
第13図B 6	9	人力掘削 C-1・2区	輸入陶磁器 青白磁 小輪花皿	(φ11.2) (H1.3)	胎土白 釉うすく透明な青	緻密	良	口縁 7%	重ね焼き用の輪状のケズリ 11c末〜12c
第13図B 7	9	人力掘削 C-1・2区	輸入陶磁器 白磁 碗	(φ11.6) H6.05 底(高台)φ6.4	胎土灰白 釉灰白〜灰(黄色い)	密 黒色粒多い	良	口縁 9% 高台ほぼ完形	外面へラ 内面くしがき 重ね焼き痕 11c末〜12c
第13図B 8	9	人力掘削 C-1・2区	瓦器 埴	(φ15.8) (H3.35)	表面濃い?灰黒 胎土灰白	密	やや良	口縁 3%	12c後半〜13c
第14図 1		溝1	焼き締め陶器 信楽 播鉢	—	明赤褐	やや粗 8mmの石粒を含む	良	—	拓本
第15図 1	9	機械掘削	土師器 皿sb	φ9.1 H2.0	橙	密 2mm以下の石粒を少し含む 赤色粒	やや良	完形	XI新?
第15図 2	9	井戸1	染付 埴 伊万里	φ11.2 H6.0 底φ4.6	胎土白 釉透明	密	良	口縁 80% 底部 完形	

瓦 類

挿図番号 掲載番号	図版 番号	地区・遺構 層位	種類・器形 (型式名)	法 量 (口径φ・器高H 残存値には残)	色 調	胎 土 粗・密や含まれる岩石・鉱物の 大きさ(φ ※mm以下など)と量	焼 成	残 存 率 口縁 ※% など	備 考
第16図 1	9	溝2-1	軒丸瓦 重圓文	(瓦当φ18.4 瓦当厚1.8 丸瓦厚2.3)	瓦当灰 裏側暗灰 胎土灰白	砂を少しまじえる	硬	—	～平安前期
第16図 2	9	湿地帯	軒丸瓦 大伴?	(瓦当φ18.0) 瓦当厚2.5	灰白	粗めの砂を多くまじえる 9mmの礫を含む	やや軟	—	平安前期
第16図 3	9	道路状遺構1	軒丸瓦 西寺	(瓦当φ17.0) 瓦当厚2.5	表面暗灰 胎土灰白	5mmの粗い砂 細かい砂をまじえる	やや軟	—	平安前期
第16図 4	9	溝2-1	軒丸瓦 蓮華文 西賀茂	(瓦当φ17.0)	表面暗灰 胎土灰白	5mmの粗い砂 細かい砂を多くまじえる	やや軟	—	平安前期
第16図 5	9	湿地帯	軒丸瓦 蓮華文	(丸瓦厚2.0)	灰白 胎土の中心灰	粗い砂を多くまじえる 赤色粒を少し含む	硬	—	平安前期
第16図 6	10	土坑6	軒丸瓦 蓮華文	—	表面暗灰 胎土灰白	7mmの礫を含む 粗めの砂を少しまじえる	やや軟	—	11c
第16図 7	10	湿地帯 A-2・3区	軒丸瓦 巴文	(瓦当厚0.9)	表面灰 胎土灰白	細かい砂をまじえる	やや軟	—	平安後期
第16図 8	9	人力掘削 C-1・2区	軒丸瓦 瓦当なし	丸瓦厚1.5	灰白	細かい砂を少しまじえる	硬	—	時代不明
第16図 9		溝2-1(中層)	軒平瓦 瓦当なし	平瓦厚3.2	凸面暗灰 凹面橙	細かい砂を少しまじえる	やや軟	—	～平安前期 2次火を受けているか
第16図 10	10	湿地上層	軒平瓦か?	(残存長8.0 残存巾5.9) 厚3.2	表面灰白 胎土灰	6mmの礫を含む 粗めの砂を少しまじえる	硬	—	平安前期か
第16図 11	10	湿地帯	軒平瓦	瓦当高3.5 厚1.3 (残存巾5.9)	表面灰白 胎土暗灰	1cmの礫を含む 砂を少しまじえる 赤色粒少し	やや軟	—	平安後期
第16図 12	10	湿地帯	軒平瓦 尾部 変わり織布	(残存長13.7 残存巾16.5) 厚2.2	表面灰白 胎土灰	砂を少しまじえる	やや軟	—	平安後期
第16図 13	10	2面目 B-4区	軒平瓦 剣頭文	瓦当高3.8 厚1.2	表面灰 胎土灰白	細かい砂を多くまじえる	やや軟	—	平安後期
第17図 1		井戸1	丸瓦	(残存長14.8) 厚2.1	表面暗灰～灰白 胎土灰白	4mmの礫を含む 赤色粒少し 砂は少ない	硬	—	平安前期
第17図 2	10	1層面下 A-2・3区	丸瓦 行基	(残存長18.5) 巾14.5 厚2.1	灰白	粗い砂を少しまじえる	軟	—	時代不明
第17図 3	10	湿地上層	丸瓦	(残存長5.3) 厚2.2	表面暗灰 破断面(芯) 橙褐	粗めの砂をまじえる 赤色粒も粗い	硬	—	時代不明 2次火を受けているか
第17図 4		溝2-1(中層)	丸瓦	(残存長6.4) 厚1.4	灰	砂を少しまじえる シマ状の胎土	硬	—	平安後期
第18図 1		井戸1	平瓦	(残存長12.8 残存巾10.4) 厚2.1	灰白 凸面灰黄褐	2cm程の礫を含む 細かい砂を多くまじえる	やや硬	—	平安前期
第18図 2	10	1層面下 A-2・3区	平瓦	(残存長9.3 残存巾9.3) 厚2.2	表面灰 胎土灰白	5mmの礫を含む 細かい砂を多くまじえる	やや硬	—	平安前期
第18図 3		湿地帯 A-2・3区	平瓦	(残存長13.0 残存巾12.5) 厚2.0	灰	5mmの礫を含む 細かめの砂を少しまじえる	やや軟	—	平安前期
第18図 4		溝状遺構1	平瓦	(残存長8.6 残存巾7.8) 厚2.3	灰	7mmの礫を含む 粗めの砂を多くまじえる	硬	—	平安中期
第18図 5		湿地上層 C-1・2区	平瓦	(残存長8.4 残存巾5.0) 厚2.15	灰	1.5cmと1.0cmの礫を含む 細かい砂を多くまじえる	硬	—	11c
第18図 6		溝3	平瓦 九州	(残存長6.5 残存巾6.4) 厚1.7	表面、胎土の中心灰 胎土灰白	細かい砂を多くまじえる	硬	—	平安中期
第18図 7		井戸1	平瓦 格子	(残存長4.7 残存巾6.0) 厚1.6	灰白(橙系)	細かめの砂を多くまじえる	やや軟	—	平安中期か 2次火を受けているか
第18図 8		溝2-1	平瓦 讃岐	(残存長8.5 残存巾7.6) 厚2.0	灰白	細かい砂を多くまじえる	やや硬	—	平安後期
第18図 9		道路状遺構1	平瓦 讃岐	(残存長6.0 残存巾6.7) 厚1.9	灰白	細かい砂を少しまじえる	やや軟	—	平安後期
第18図 10	10	2層上面 A・B-1・2区	平瓦 格子	(残存長10.5 残存巾10.5) 厚2.2	凸面灰 凹面灰白	細かい砂を多くまじえる	やや硬	—	平安後期か
第18図 11		道路状遺構1	平瓦	(残存長3.1 残存巾6.0) 厚1.1	灰	6mmの礫を含む 粗めの砂を多くまじえる	硬	—	平安後期

第5章 まとめ

今回の調査は、平面積 180㎡程の小規模なものではあったが、平安時代前期のかなり早い段階に造成されていたと見られる坊城小路の東西両側溝とその間にある小礫敷状を呈する路面を調査し、記録が得られたことは大きな成果であった。平安時代前期の遺構は、砂礫主体の地山直上の整地によって形成されていた。長岡京期以前の遺構、遺物はともに確認していない。

検出した部分の坊城小路の構成部位の規模は、両側溝が 0.8m ～ 1.2m 程、路面部が約 7.2m 程であり、『延喜式』の京程にある小路の規定規模の数値とに大きな齟齬はない。また路面や側溝の南北軸は真北に近く、京都市埋蔵文化財研究所が提示している平安京の復元案の、街路の南北軸線とほぼ重なっている。平安時代初期の建都時に、設計図に基づいて忠実に造成された小路であると確定してよいだろう。

今回検出した坊城小路は、平安宮＝大内裏の南西フロント地域での街路建設の施工水準の高さをよく示すものであった。詳細な造成時期に関しては、出土遺物からだけでは難しい面もある。しかし、側溝内や西側溝のすぐ西に広がる湿地の下層部などからの出土遺物には、平安京Ⅰ期中型式の中相段階（790 年代中心）に位置付けられるものも確実に含まれている。あくまで状況証拠ではあるが、平安時代の最初期となる 8 世紀代最末期頃には、両側溝は開口し機能していた可能性を示すと理解出来、もちろん道路全体も完成し機能していたと考えてよいだろう。

このように肯定的な理解が可能な調査成果に相反する、解釈が難しい成果がいくつもある。その 1 つであるが、坊城小路両側溝の西側に広がる浅い湿地帯についての理解である。湿地は東側の神泉苑の大池と同様、平安宮や旧二条城がのる扇状地の先端下の低地側に形成されていた自然地形であろう。調査結果から西側溝西肩部は、湿地の東辺に粘土と杭列や横板材などによって造作されたものと見ざるを得ない。犬走りや築地塀なども築造されていないようである。この場合、坊城小路から邸内が覗けることとなり、このような例は京域内の既調査成果ではほとんど類例を知らない。今後、周辺地域での新しい調査成果の蓄積を待ち、理解を深めて、整合性のある妥当な解釈を得る努力が必要である。

坊城小路は、平安時代最初期に造成された中心部に位置する立派な小路ではあるが、平安時代前期の内には埋没が進むようであり、前期末あるいは中期の前半頃にはほぼ埋没し、側溝の機能は失われている。路面部は幅を減じながらも、平安時代後期から鎌倉時代頃までは生きていたようである。幅をさらに減じ小道化して、江戸時代初めの頃までは、かろうじて機能が維持されていたと見られる。

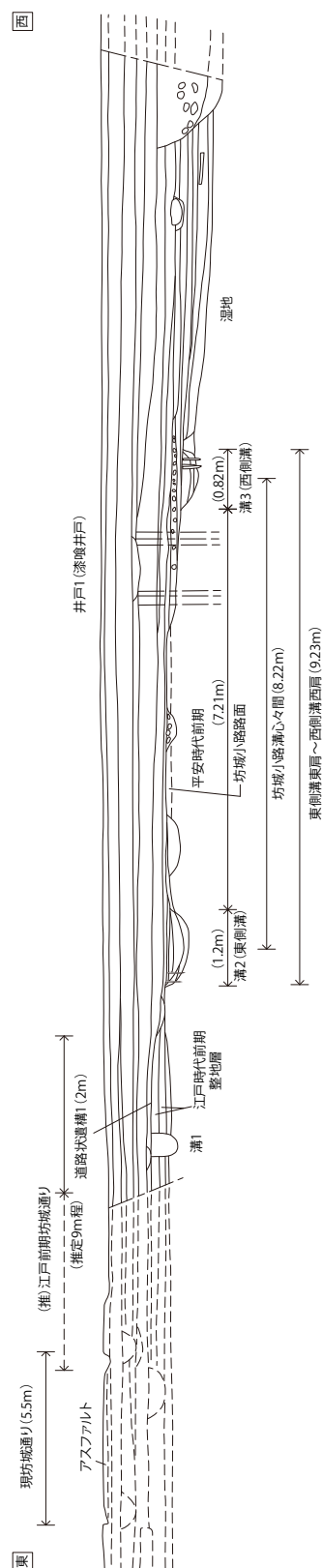
周辺の既存の調査成果からは、朱雀大路およびその周辺を含む右京のほぼ全域にとどまらず、東側隣地の神泉苑などが、左京の中でも宮に最も近い京域内一等地であるにもかかわらず、同様に平安時代中期頃以降にはかなり衰退的傾向が進むようだ。当地の坊城小路の衰退的変化も周辺地域と連動したものと考えられる。平安宮や朱雀大路を含めた右京全域の衰退的傾向とも関連す

ると考えているが、これらもさらに資料蓄積を進め、妥当な歴史評価が必要な大きな問題である。

当調査地からの遺物の出土状況も、当地を含むこの地域の盛衰をよく示している。平安時代最初頭から前期に位置付けられる遺物は、瓦類を含めて、須恵器、土師器、緑釉陶器などが一定量出土している。須恵器には硯なども含まれており、遺物も活気のあった文京地区の様相をよく示している。しかし、中期に入る10世紀前半頃を境に出土遺物の減少も大きく進む。平安時代末期から鎌倉時代初め頃には、まだ少量ながら遺物の出土は見られるが、鎌倉時代以降の中世にはさらに出土遺物は少なくなる。当地域は、中世を通じて耕作地化が進み、都市近郊は農村地化するのであろう。

次に遺物が増加し始めるのは、江戸時代に入って以降である。江戸時代の古地図などによれば、江戸時代に入って以降は、神泉苑より西の地域の農村的景観は大きく変わらないようである。しかし、江戸時代前期の初め頃には、調査区の東辺部分に南北方向と東に広がると見られる小礫敷の道路状遺構が造成される。平安時代の坊城小路の東側溝より東で、道面部が1本分東へずれた位置となり、その西端は現在の坊城通り下に重なるものと推測できる。成立時期からは、徳川幕府の二条城の築城と関連して進められる、城の周辺の施設整備に関連した遺構と見ている。東のすぐ北には、京都町奉行所が建ち、その南側の当地の隣地には奉行所の組屋敷が造られている。上述の道路状遺構は、奉行所建設の東側隣地の再開発に伴い、開発地の西限を画する位置に新たに造成された、江戸時代の坊城通りの最古となる道路遺構と見られる。

坊城通りより以西は、江戸時代前期には小路を含む以東より1段低く、耕作地的土地利用が続いたようだ。通り以西の再都市化は、整地層やその上面に造られる井戸を含む町屋跡の遺構から、江戸時代中期以降と見られる。しかし、連続して現代に続く形での町屋の進出は、幕末か近代に入ってからのものである。



第19図 現場認識概念図

【参考文献】

〔発掘調査報告書〕

植山茂・山下秀樹『平安京右京五条一坊皇嘉門大路』（『京都文化博物館調査研究報告』第5集、京都文化財団、1990年）

小森俊寛・原山充志「平安京左京五条一坊」（『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都市埋蔵文化財研究所、1993年）

上村憲章・小森俊寛「平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮」（『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都市埋蔵文化財研究所、1995年）

辻村純代・前川佳代・千喜良淳『平安京左京五条三坊八町』（『平安京跡研究調査報告』第19輯、古代学協会、1997年）

布川豊治『平安京右京三条一坊七町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』2004-3、京都市埋蔵文化財研究所、2004年）

〔史料〕

『延喜式』卷第四十二「左右京職」（『新訂増補 國史大系〈普及版〉』延喜式 後篇、吉川弘文館、1972年）

慶滋保胤「池亭記」（『新日本古典文学大系』27 本朝文粹 卷十二、岩波書店、1992年）

『拾芥抄』（前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣善本影印集成』17、八木書店、1998年）

町田康訳『宇治拾遺物語』卷第十三ノ一「上緒の主金を得る事」（池澤夏樹個人編集『日本文学全集』08、河出書房新社、2015年）

〔その他〕

京都市『京都の歴史』10年表・事典（學藝書林、1976年）

角田文衛総監修、古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』（角川書店、1994年）

森谷尅久編『図説 京都府の歴史』（河出書房新社、1994年）

金田章裕編『平安京—京 都市図と都市構造』（京都大学学術出版会、2007年）

網伸也『平安京造営と古代律令国家』（塙書房、2011年）

京都市編『史料 京都の歴史』第2巻「考古」（平凡社、1983年）

小森俊寛・上村憲章・平尾政幸「土器・陶磁器の様相」（『平安京提要』、前出）

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」（京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』第3号、京都市埋蔵文化財研究所、1996年）

小森俊寛『京から出土する土器の編年の研究』（京都編集工房、2005年）

平安博物館編『平安京古瓦図録』（雄山閣、1977年）

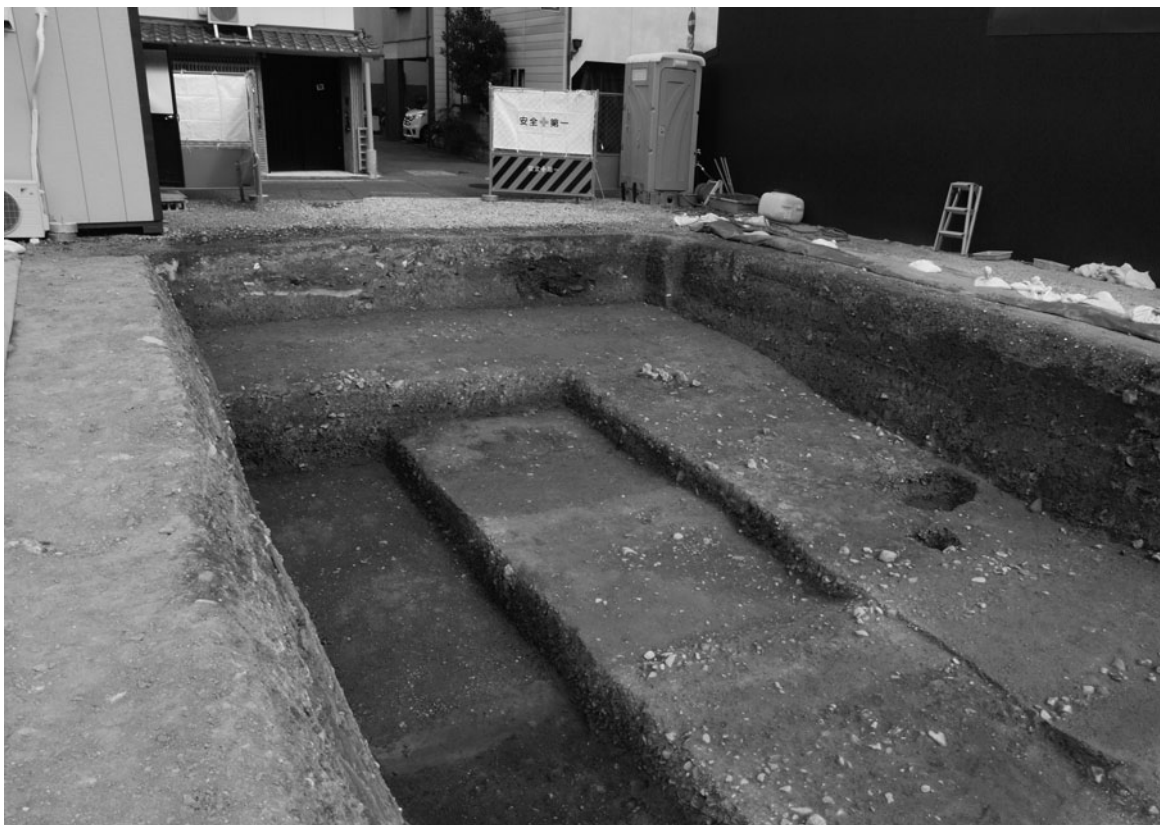
植山茂「平安京の瓦の布目」（平安博物館編『日本古代学論集』、古代学協会、1979年）

上原真人「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」（『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集—』、平凡社、1982年）

圖 版



1. 南区 調査第1面 西から



2. 南区 道路状遺構1 北西から



1. 南区 溝1 南から



2. 北区 溝1 北西から



3. 南区 井戸1 北から



4. 南区 井戸2 北から



5. 北区 井戸3 北から



1. 北区 調査第2面 西から



2. 北区 調査第2面 南西から



1. 南区 調査第2面 西から



2. 南区 調査第2面 北西から



1. 南区 調査第2面全景 坊城小路・湿地



2. 南区 調査第2面溝3 (坊城小路西側溝) 杭列・湿地



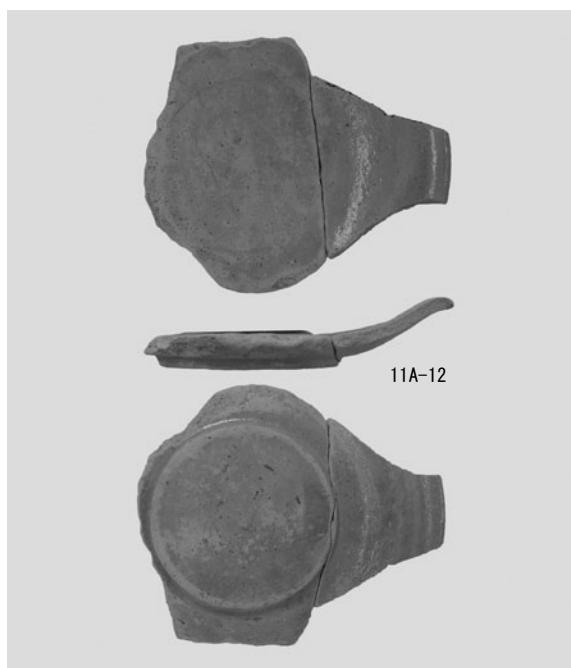
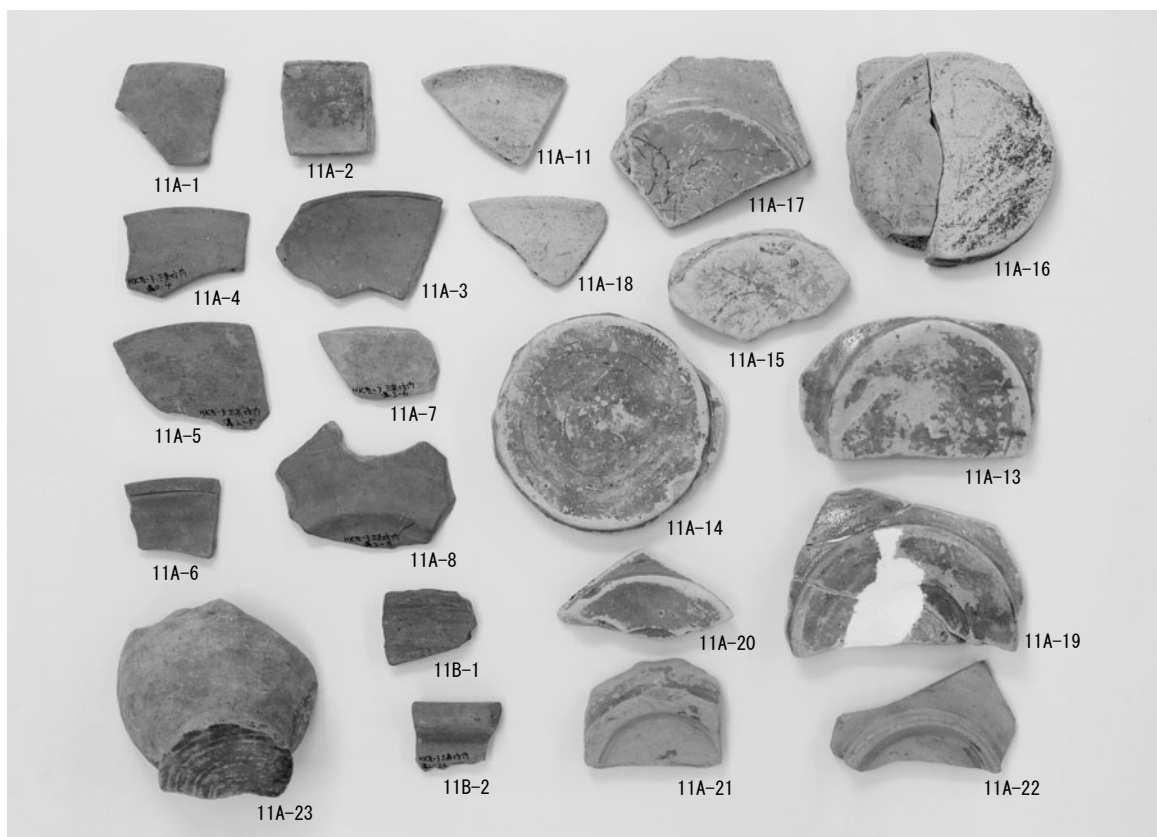
1. 南区 坊城小路 東側溝（溝2）北西から

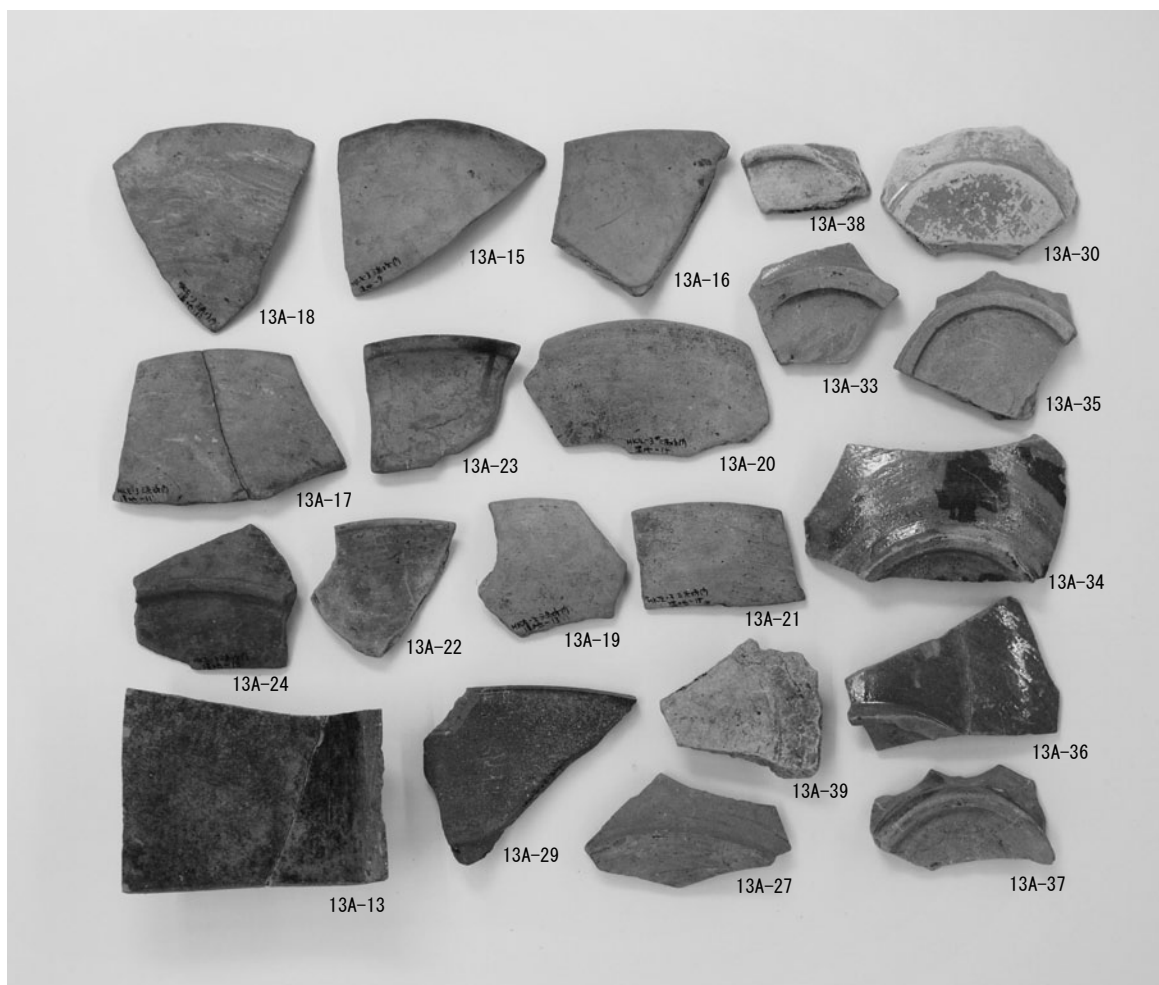
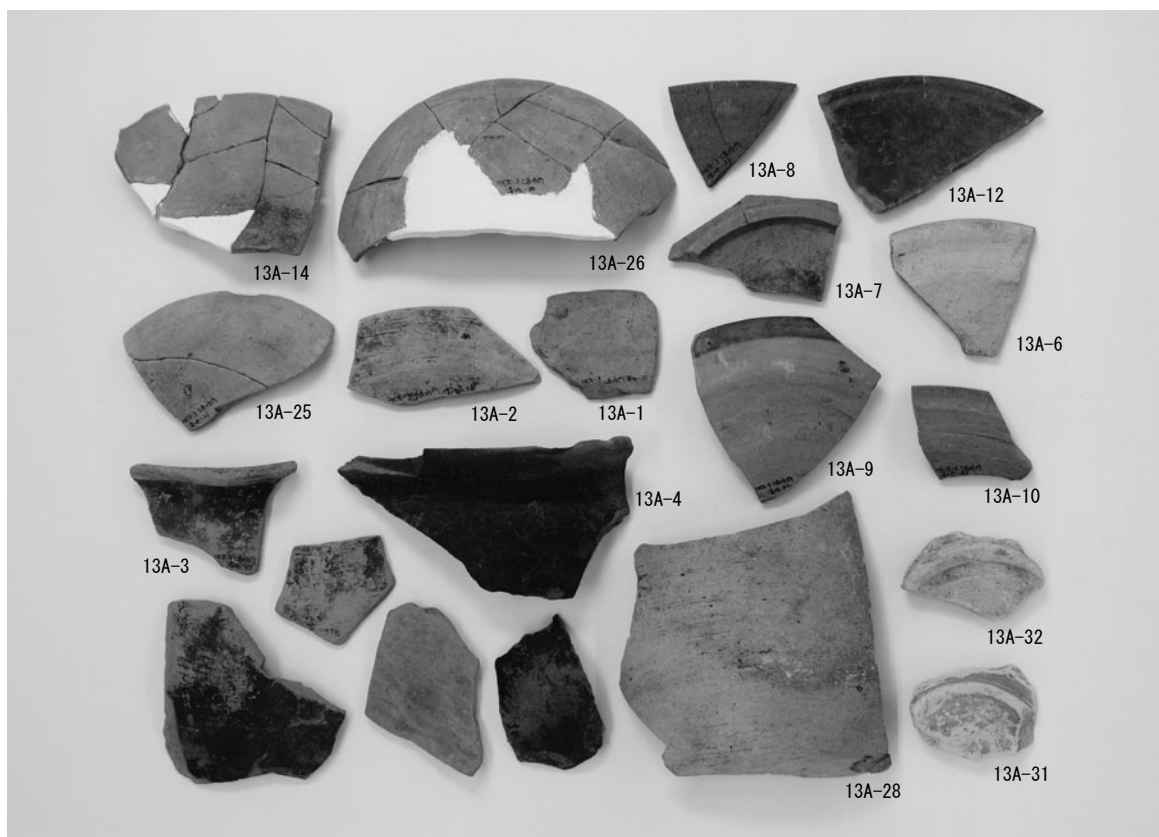


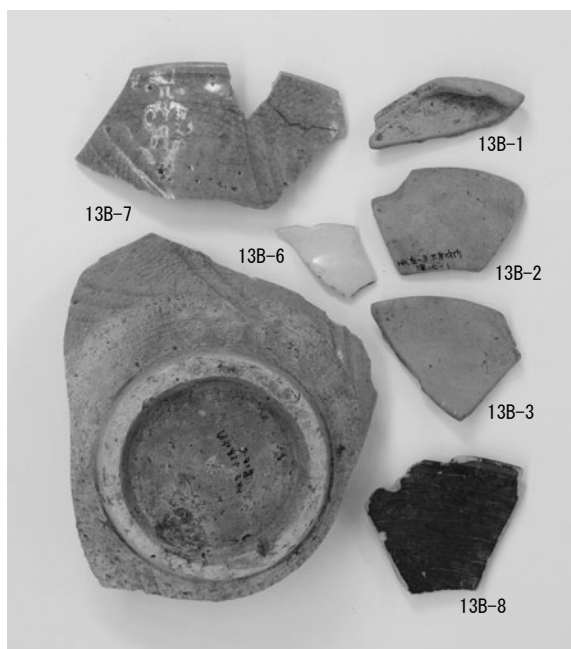
2. 南区 坊城小路 東側溝（溝2）東辺杭列 西から

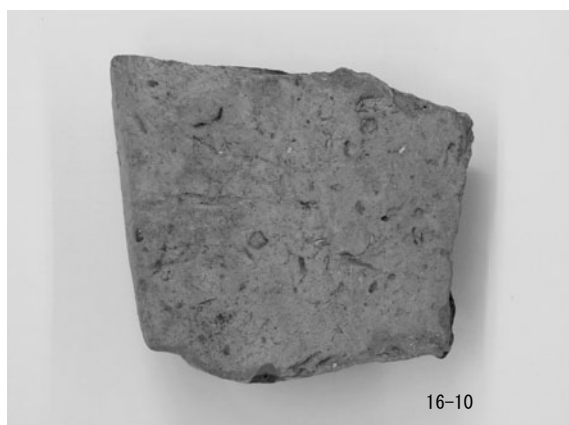
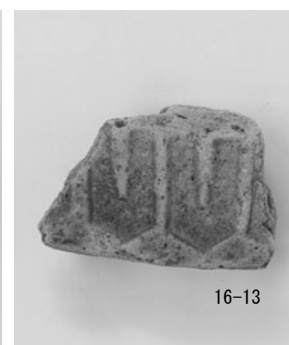
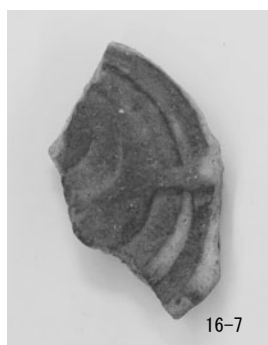


3. 南区 坊城小路 西側溝（溝3）西辺杭列・湿地 北東から









報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょういちぼうよん・ごちょうあと								
書名	平安京左京三条一坊四・五町跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告								
シリーズ番号	第5集								
編著者名	小泉信吾・小森俊寛・植山 茂								
編集機関	有限会社 京都平安文化財								
所在地	〒612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4								
発行年月日	2019年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
へいあんきょうさきょう 平安京左京 さんじょういちぼうよん 三条一坊四・ ごちょう 五町	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうかんだくいんちよう 西ノ京勧学院町 3, にしのきょうなんせいちよう 西ノ京南聖町 2	26104	1	35 度 00 分 33 秒	135 度 44 分 39 秒	2018 年 8 月 3 日 ～ 2018 年 9 月 26 日	180㎡	宅地開発	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項			
平安京左京 三条一坊四・ 五町	都城跡	平安時代 前期 ～ 江戸時代末	道路・側溝 土坑・井戸	須恵器・土師器 緑釉陶器・硯 軒丸瓦・平瓦		平安時代前期前半の坊城小路 路面と両側溝は注目			
要 約	調査地は平安京の左京三条一坊四町から坊城小路をはさみ五町西端に及ぶ。大内裏平安宮の南面正面の朱雀門に近く、京域内の中心地に位置している。今回の調査では平安時代前期の坊城小路西・東側溝および護岸施設、江戸時代二条城整備に伴う道路状遺構を検出した。								

平成 31 年（2019 年）3 月 31 日発行

平安京左京三条一坊四・五町跡
（京都平安文化財調査報告 第 5 集）

編集 有限会社京都平安文化財
〒 612-8018 京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4
電話 075—644—6600

印刷 あおぞら印刷株式会社
〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15
電話 075—813—3350

